ニートと社会復帰と異世界と

たかっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ニートと社会復帰と異世界と

【Ｎコード】
Ｎ５７２５Ｘ

【作者名】
たかっち

【あらすじ】
ある日のコンビニ帰りに異世界に引き摺り込まれたオレ。
目の前にはひれ伏す幼女…

〈災厄の覇王〉に向って唱えた王家に伝わる
古の呪文は召喚術？
その覇王さんは、俺の足元で死んでます…

あっ！なーんだ！帰れるんスね？

へ？５年後？それまでは？
は？なんですか？
そのキラキラした目は？

行き当たりばったりの異世界召喚物語
無気力なニートが見る世界は？

プロローグ（前書き）

初めまして！一応プロットなんかも書きましたが筆者処女作です。
拙い文章になると思います。文章の練習でもあります。
暇つぶし以外での用途はお控え下さい。

プロローグ

「はぁっはぁっ…」

私は走っていた。
どれ位の間走り続けているのだろう？
もう足に力は入らない。
一歩進むごとに危うくバランスを
崩しそうになる。
それでも…止まる事は許されない…。

私を守るために散って行った
忠義の厚い臣下達…。

何故？

ほんの少し前まで、少なくとも昼過ぎまでは
いつもと変わらない日常だったはずだ…。

突如として神殿に出現した
〈災厄の覇王〉

その前に穏やかな日は瞬く間に
瓦解してしまった…

「女王陛下っ！」

前方を先導していた近衛兵が私を呼ぶ。
彼が開いているの扉は、この神殿で

最も硬い防壁を誇る〈光神の間〉
私が扉を潜ると、すぐに戸が閉められる。
扉の向こうでは悲鳴に混じって
「オレ…生きて帰れたらアイツに告白するんだ…」なんて嫌な予感
しかしないセリフまで聞こえて来る。

「お待ちなさい！まだ向こうには残っている
者たちがいるはずです！」
私は整わない息を抑えながら叫ぶ。
まだ助けられる者がいるはずだ。
私は女王なのだ、父上に立派な王になると
約束したのだ。

でも私の言葉は、この部屋に虚しく響いた
だけだった。今、この部屋には私と近衛兵が二人の三人だけ…

扉を閉めた近衛兵の啜り泣く声だけが
響いていた…。

そう…本当は分かっている…。
伝承の通りなら、もう終わりなのだ…。
〈災厄の覇王〉には贖えない。

黒く硬い殻に覆われた体
無数の足を駆使した、常軌を逸した動き
高らかに空を駆ける2枚の羽

絶望の淵にいる私を近衛兵の悲鳴が

現実に引き戻す。

「バカなっっ！どうやって？」

悲鳴の先を見た私の目は〈災厄の覇王〉を捉えていた。

ドアは開いていない。

近衛兵は恐怖に顔を引き攣らせながら魔法を放つ。

炎と雷の固まりが〈災厄の覇王〉に迫る。

私は来るべき爆発に備え、その身を伏せた。

……。

…何も起こらない？

「まままま…魔法が効かない？」

何が起きているのか分からない私に近衛兵の震えた声が届く。

（魔法が効かない？　いや…これは！）

次々と放たれる近衛兵の魔法。

その全ては〈災厄の覇王〉に届く直前にまるで霧の様に消えてゆく。

まるで最初から無かったかの様に。

〈災厄の覇王〉は身じろぎ一つしない。

異形すぎるその体からは、表情は読めない。

だが、まるで私達を嘲笑うかの様に魔法は

掻き消されてゆく。

そして、限界まで魔法を酷使した近衛兵達に
〈災厄の覇王〉は羽を拡げて牙を剥く。
まるで命を吸い尽くされたかの様に、近衛兵
達は力無く崩れた。

近衛兵は死んでしまったのだろうか？
青白く変色してしまった彼等の生死は私には
分からない。

もう私を守ってくれる者は誰もいない。
私の足は勝手に後ろへ歩を進める。
一歩…二歩…三歩…四歩…

（怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い…っでもっ？）

私の中の決意と共に、足は歩みを止める。
せめて一太刀…この化物に傷の一つでも
くれてやらねば、倒れていった臣下達に顔向け出来無い…出来る訳
がないっ！

私の口は紡いでいた。
父上から教えて頂いた禁呪を…
王家に伝わる最古の呪文…

「……バ〇スッ！」

その時、私はこの呪文が世界に

大きそうで大きくない、でもちょっと大きな
変革をもたらすとは考えていなかった。

【第1話】落下するニート

「あ～…宝くじでも当たらねぇかなぁ…」

そんなニートの常套句を吐きながら
俺は近所の川の土手を歩いていた。
手にはコンビニ袋がぶら下がっている。
ちなみに中身は
タバコ・1カートン
ビール・2本
ビーフジャーキー
ポテチ
少しばかりニートにしては上等な中身だ。

ブラック企業に根性だけでしがみつき
ついに心が折れて辞めてから一年と数ヶ月。
失業保険も切れ、貯蓄も少なくなってきた。そろそろ働くしかねぇな～って状況だ。
それでも中々働く気がしない。

「宝くじでも～」なんてセリフも何百回目だろう？買ってもないのに当たる訳ないのに。
自嘲気味に土手を歩いていると、どこからともなく声が聞こえた気がした。

「バ〇ス」

某空中都市の崩壊キーワード？
でも飛行石なんて見当たらないぞ？

ってか、ある訳ねぇ！
そんな一人ツッコミをしつつ辺りを見回す。
時刻は既に２３時過ぎで人通りもない。
こんな時間にラピュ◯ごっこしてるヤツが
いたら怖すぎる！
だが警戒心とは裏腹に、周囲には誰もいなかった。

「ついに俺の頭も腐ってきたか…」
そう呟いた瞬間、背中の方から突風が吹き荒れた。いや風じゃない！

？　？
世界が吹き荒れてる？

背後から感じたソレは、瞬く間に俺の
周囲を円形に囲んでいた。
そして次の瞬間、足元にあったハズの
土手の感触が、地面を捉えていた足裏の
感覚が消えていた。

「なっっ？」

落ちている？
錯覚じゃない！
目の前は映画のワンシーンのように
様々な景色が高速で流れて行く。
ついでに体が熱い！
痛いくらいにめっさ熱い！
でも余りの恐怖に背中が寒い？

もう訳が分からん？
全くもって訳が分からない。
（ヤバイ！死ぬ？）

次第に薄れ行く意識の中で足元に光が見えた気がした。
（まあ、いいか…あんま楽しくなかった人生だけど諦めが肝心だよな…次に産まれ代わったら金持ちで、家庭円満な環境で育った超イケメンが良いな…あっ？続きが気になってたラノベ明日発売だったのに…ツイてねぇ…
あの世でもラノベって読めんのかな？…）

そんなニート根性丸出しの思考を巡らせながら、俺は閉じゆく意識に身を任せた…。

【第2話】混乱するニート

そんなニート根性丸出しの思考を巡らせながら、俺は閉じゆく意識に身を任せた…。

…ハズだった。

次の瞬間、強制的に目覚める事になる。
落下の終わり…つまりは着地だ。

ドォーーーン！

なんて漫画みたいな優しい音じゃなかった。
擬音語にするなら

べちゃっ！

意識が遠のいていた為に、背中からモロに
着地したらしい。
落下の衝撃で肺の空気を一気に吐き出す。
あまりの激痛に地面を転げ回る。
副産物として目の前がチカチカする。
運悪く交通事故にでも会った事がある人には
分かって貰えると思う。
星なんかじゃなく、網膜の中に赤やら緑やらの光点が踊るアレだ。

ひとしきり地面を転げ回り
ひとしきり呻き声を上げて、
意識の回復を待つ以外に術はない。
咳き込みつつ、徐々に回復した意識の中
視界が捉えたモノは…

……ひれ伏す幼女だった…。

……えーーーっと…

目の錯覚を信じつつ、無理矢理に
深呼吸をして目を閉じる。
わずかな希望に縋りつく様に目を開ける…

やっぱり…ひれ伏す幼女がいる…

「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
酸素を取り戻しつつあった肺から、絶叫と共に再び酸素が吐き出される。
幼女は俺の絶叫に一瞬肩を震わせたが、
まだひれ伏したスタイルのままだ。

（落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け！

状況を整理しろ！しっかりしろ！俺！）
俺は呪文の様に自分に言い聞かせ、現実を何とか手繰り寄せ様とする。

さっきまでは土手の上
とりあえず俺は幼女に土下座をされている…

いつものコンビニの帰り道
そして幼女は土下座をしている…

幼女の前で絶叫した俺
更に幼女は土下座をしている……

幼女をマジマジと見る俺
幼女は土下座しながら
「はうぅぅぅ」とか言ってる…

……これってマズくね？
いや、マズい！本気でマズい！
洒落になってない！こんな所
通行人やこの娘の親に見られたら？
通報なんかされたら再就職どころか
人生終了フラグじゃね？
つーか、一刻も早くジャパニーズＤＯＧＥＺＡを
土下座してでも解除してもらうべきじゃね？

思考が纏まるや否や俺は幼女に駆け寄る。
脇の下に手を入れ優しく立ち上がらせて
スカートについた汚れを払う。

「お嬢ちゃん？どうしたのかな？パパかママはどこかな？」
よし！これなら転んだ子を助け起こした
通りすがりの大人に見えるはずだ！
ここがどこかは置いておいて！

「…お兄ちゃん…怒ってない？」
幼女は上目遣いに呟いた。
真ん丸なホッペがなんとも可愛い。
やっぱ子供はこれくらいの年齢が一番
可愛いよね？これが後、何年かすれば
下ネタ大好きなビッチになるなんて…

「大丈夫だよ～！オジちゃん怒ってないよ？
転んだのかなぁ？痛くないかな？」

「うん！」

「よ～し！エライねぇ！良い子だ！」
俺は出来るだけ優しく頭を撫でた。
まだ目眩はするし、呼吸も正常化とは言い難いが、とりあえず人生
終了フラグは回避出来たハズだ。
しかし、ここは何処だろう？
土手の上にいたのは間違いない。
だが今いるのは石造りの部屋みたいだ。
窓から見える外は明るい。
明るい？２３時に？

怪訝な表情で部屋を見まわす俺に少女は
スカートの端を摘み、丁寧なお辞儀をして
見せた。

「この度はまことに申し訳ありません。
わたくしは第４５代精霊王シンフォニアと
申します」

……はい？

【第3話】納得するニート

「この度はまことに申し訳ありません。
わたくしは第４５代精霊王シンフォニアと
申します」

……え～っと…。

この娘は何と言った？
精霊なんとか？
聞き間違いかな？
いや、まあ子供の言う事だし
そういう遊び…なのか？
だが外国人（？）なのは間違いなさそうだ…

よくよく見れば目の前の幼女は
サラッサラの銀髪に、瞳は青い。
純白のドレスも良く似合っている。

あまりに見事な土下座と
あまりの超展開に見過ごしていたが、
これで日本人です！などと言われた日には
この娘の苦労した過去を妄想して、
三日は涙が止まらないに違いない…。
ってか、見過ごすなよ…俺…。

「え～っとシンフォニアちゃん…で良いのかな？」
「はいっ！」

うおっ！間髪入れずに返事が返ってきた！
しかも元気に右手を挙げているだと？
ヤバイ…可愛い…連れて帰りたい……
…いや嫌いや嫌いや否！待て！
３０も過ぎたオッサンの思考としては
マズ過ぎる！そもそも俺には幼女趣味も
ロリ属性もないっ！
べ…別に「小学生は最高だぜっっ！」なんて
言った事なんかないんだからねっ？

…そんなキャラ崩壊を起こしかけた俺を
幼女は首を傾げて見ていた…

イカン！このままではイカン！
不審者丸出しの上に、全く話が進まない！

「コホン…初めまして。
俺…いや、僕は遠野樹と申します。」

俺も姿勢を正し、礼儀正しく挨拶をする。
これは言わば俺の処世術。
相手が幼女だろうと手は抜け無い。
礼儀を以って接して来る相手には
礼儀を以って返す。
初対面の相手には、取り敢えず下手に出る。

無職とはいえ、元ニッポンのサラリーマンだ。

「それでシンフォニアちゃ…さん。僕は近所の土手を歩いていたはずなんですけど、
気がついたらここにいました。自分でも
おかしな事を言っているのは分かっています。状況を整理したいので、大人の人がいらっしゃったら話しがしたいのですが…」

そこまで話すと幼女シンフォニアは突然
スカートの裾を持って跳び上がった！
空中でそのまま足を折り曲げ、両腕は
天高く突き上げられている？

「なっ？」

驚く俺の前でシンフォニアが繰り出したモノは？
それこそ驚くような……土下座だった…。
脛部分から着地してね…そりゃあ、もう綺麗に、流れるように土下座にシフトチェンジしてた…。

「ヒック…エッグ…あのね…？△？√…でね…
£？∞だったの…でもね、シンフォニアはね…
◎∴　？？だったんだよ？だからね…あのね…ごめんな、ざい～～～ウェッオウェ～…」

…お分かりになっただろうか？
俺にもさっぱり分かりません…。
気分はジャイア〇にイジめられた
ノビ〇くんの泣き事を聞いている気分だ…。
最後にはえずくシンフォニアを再び抱き起こして背中をさすってあげたよ…。

断片的に聞こえたシンフォニアの話から
推測すると……そーゆー事？

だってホラ…シンフォニアの肩越しに
見えちゃったもん…

昼みたいに明るいのに…

ありえない位バカでかい月が……

ここがどこだか置いておいて…
じゃねーよ…俺…。

【第４話】驚愕するニート

俺こと遠野樹はツイてない奴だった。
不運なエピソードは話すと気が滅入るので
割愛させてもらう。
分かりやすく言うなら

小学生の時とかに、クラスでザリガニなんかを飼っていたとしよう。
クラスの皆で交代で
世話なんかしちゃったりしてな？で、オレは
自分が当番の日に早めに登校するんだよ…。
そしたらザリガニ死んでたりしてさ…
クラスの奴等は「遠野が殺した！」とかさ…
挙句には学級新聞に書かれたりしてさ…
まぁ、クラスに一人はいるツイてない奴って
所だ。
べっ別にイジめられてた訳じゃないんだからねっ？

だから今の状況が
俺にとっては【不運】の延長線上。
またか…ｏｒｚ
って思う事ですんなり納得できたんだよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「え～…つまり、ここは僕からすると異世界です…と…」

「……はい」

「で…貴方は人間ではなく、光の精霊とやらで、しかも女王だと…」

「……はい」

「で、貴方は〈災厄の覇王〉とやらに追い詰められて王家の禁止されている呪文を使った…と」

「……はい」

「で、その呪文とやらは異世界の生物の召喚呪文だった…と…」

「っ…でも私は知らなくて…」

「では先程の詠唱とやらを言ってください」

「え～っと…古の契約に基づき開け！異界の門！我は光の精霊王！我が剣、我が盾となる者を導き、この道を照らせ！バル○！」

「言ってますよね？思いっ切り〈異界の門〉とか〈～者を導き〉とか！明らかに召喚っぽいセリフ入ってますよね？」

「はうぅぅ…だって父上は…」

「だってじゃありません？」

等々、問答しつつも俺は今シンフォニアから自分の身に起きた事について説明を受けている。

あの後、俺は泣いているシンフォニアを慰めている所を生き残った
（？）シンフォニアの
部下に見つかり、色々誤解を解いた後に
神殿とやらから、王宮とやらへ案内されて
今に至る。

シンフォニアの話を要約するならば

〈災厄の覇王〉が怖くて、禁止されてた
呪文を唱えたら召喚術の魔方陣（？）が
見えたから慌てて止めようとしたけど
間に合わなかったらしい。

と言うか、魔法があるらしい。

〈災厄の覇王〉は俺が上から落ちて来た事で
死んだらしい。

ここは俺からすると異世界らしい。

シンフォニアは人ではなく〈光の精霊王〉で
この世界の宗教上は神様に近い存在らしい。

と…まぁ、こんな所？
オーケェーオーケェー…
ここまではある意味テンプレ的な展開だ…。
否！全然ＯＫじゃないけど、理解はした。
だってシンフォニアも、従者の方々も…
なんか光ってるし…全員幼児だし…。
しかも浮いてるし…。

（移動に使うと歩くより遅いらしい）
月だってアホみたいにデカいし…。

ここまでテンプレ展開だと逆に冷静に
なれるよね？ニート舐めるな！って感じだ。
うん！もちろん今の俺は頭がおかしい事を
言ってる自覚はあるよ？

さて…ここで俺は聴かねばならない。
数々の先人が口にして、辛酸を舐めてきた
あの質問だ！
正直怖い…圧倒的絶望を味わうか…または
どんな無理難題を吹っかけられるか…
それでも聴かねばならない。
ダメだった時にそなえて心を落ち着かせて…
今！万感の想いを込めて？

「…僕は帰る事が…出来るんですか？」

「はいっ！出来ます！」

「そうですよね〜、無理ですよねぇ……
…？…ええぇェえェぇえっ？？？？？
ちょ…まっ…え？……うえぇえ？」

オレは予想外の出来事に、思いの他弱かったらしい。いや、自分に対して好条件だった事が驚きの原因だ。
まさか自分の地味不幸体質にこんな好条件がやってくるなんて…。
ちなみに先程の奇声にシンフォニアはドン引きしている…って言うか半泣きだ。

「わーっ！ゴメン！スイマセン！怒ってないですよ〜シンフォニア女王陛下様〜」

「はうぅぅぅ」

ちくしょう！この「はうぅぅ」は反則だろ？この野郎！リアルでやられたらもっとイラつくと思ってたのになんだこの可愛さは？
…いかん！また脱線する！
今はとても大事な所だった！

「で！本当に僕は帰れるのですよね？」

「……はい…召喚術の魔方陣は分かっているので、そこから逆算して送還術が出来るはずです…」

シンフォニアは居住まいを正しながら
帰れる！と明言してくれた。
なんだかモジモジしてるけど、可愛いなぁ！
コンチクショウ！

「……五年後ですケド…」

「……はい？」

【第４話】驚愕するニート（後書き）

思っていたより導入長いですね…
文章って難しい…

ｉＰｈｏｎｅで投稿してますが
４＆ａｍｐ；５話は打ち込んだ後に、間違って
消してしまったので二回目です…

【第5話】嘆息するニート

「……五年後ですケド…」

「……はい？」

よし！またまた思考の整理が必要だ！
異世界に召喚された俺は、どうやら帰れるらしい。ここまではＯＫだ。
数々の物語の先人が帰還出来なかった事を考えるなら上々だ。だが帰れるのは5年後？
なるほど…どうやら先程の態度はモジモジしていたのでは無く、バツが悪かったのか…。

「えっ…と…、帰れるのは分かりました。
それで、何故5年後なのでしょうか？」

「代々精霊王家に伝わる伝承には、この禁呪を一度使用したら、5年は使ってはいけないとしか…」

「…えらく曖昧な伝承ですね」

「でもっ…でも！推測はできるのです！召喚術が封印されたのは太古の昔。その理由は世界を歪めるからだと聞いているのです！」

「歪める？」

「はい！世界に穴を開けて、違う場所からモノや生き物を召喚する

のは、世界に大きな負担をかけるのです！まして異世界ともなるとその穴は大き過ぎて、これ以上穴を開けると世界が壊れちゃうのです？次に使うのは世界についた傷が塞がってから…つまり、その期間が5年後なのだと思うのです！」

なるほど、つまりは異世界に帰れる穴は開けられるが世界が負担に耐えられない…と…。
じゃあ、無理は言えないなぁ…。
自分一人が家に帰る為に、この世界が全滅とかイヤすぎる…。
どんなメガザルだよ！どんな等価交換だよ！
しかも、なんでドヤ顔なんだよ！
シンフォニア？

心の中で、ひとしきりツッコミを入れてから
俺は盛大に溜息を付いた。
ドヤ顔だったシンフォニアは、俺を見て気まずさを思い出したのか固まっている。

「…帰れるのが5年後というのは理解しました。では幾つか質問して良いですか？」

「へ？」

俺の言葉にシンフォニアは素っ頓狂な声をあげる。ん？なんか変な事言ったか？

「あの…怒ってないのですか？」

「多少は怒ってますね…でも貴方にもどうしようも無いんでしょう

？」

「でも…でもイツキ様は異世界に召喚されたのですよ？しかも勝手に！私の身勝手な行いで！そんなの人攫と同じじゃないですか？」

「それについては知らなかったんでしょう？
しかも、貴方は既に謝罪されてますし…」

「…私を許す…のですか…？」

「貴方を責めても状況は変わりませんよね？
しかも五年後には帰る事が約束されている。じゃあ、良いですよ？」

そこまで言うとシンフォニアは盛大に泣き出した。
どうやら、それなりに張り詰めた気持ちで応対をしていたらしい。
それこそ世界と引き換えに帰せとか言われると思ったのかね？
無理難題吹っかけるクレーマーなんてガラじゃないんだけどな…みっともないし…
まぁ、この娘責任感強そうだしなぁ…
精霊とか王族とか神様みたいなモンとか
言ってたのに…
俺なんかに土下座までするし…
スカート捲って、パンツ下ろして、尻を引っ叩く…なんて某都知事が激怒しそうなマネ
しないで良かった…本当に良かった…。
そ、そんな事しようなんて全然思って無かったんだからね？

「ふぇう……有難うございますぅぅ…ふぇぇぇ～～～～～！？」

泣いているシンフォニアの涙を手で拭い、

頭を撫でてやる。
神様だか王様だかには、多少無礼な態度かも知れ無い。それでも泣いている幼女を、そのままには出来なかった。

【第6話】分析するニート

シンフォニアを落ち着かせ、俺は質問を再開する。五年も帰れないのであれば、この世界での身の振り方、向こうの世界に帰ってからの生活の為に等々、情報は必須だ。

今いる場所は精霊王国。
ここはこの世界の神様の国で、人間は
普通入ってこられないらしい。

そして遥か下界に広がるのが
人間の住む土地シンフォガルド。人間や、
獣人、亜人と呼ばれる者達が国家を作っているらしい。

シンフォニアや、その従者の様に人型を取れる精霊は、かなり神格の高い精霊だけ。
シンフォニガルドにいる精霊は、普通は
視認すらできないらしい。

基本的に精霊は人間社会には不干渉らしく、
細かい情勢は分からないらしい。

金や銀などの鉱物は存在するらしい。

分かった事はこれくらいか…まず人間がいて
良かった。さすがに一人、全く違う種族に囲まれて五年は辛い…。
そして金や銀の鉱物が
ある事！これは持ち帰る事が出来れば、帰った後の生活に目処がつ

く。
幸い引き摺り込まれた時に見た〈円形〉の
範囲に収まる程度なら、荷物の持ち帰りも
可能らしいし…。

五年間も帰れなかった場合、最も困るのは
帰った後の生活だ。五年も帰らなければ、
間違いなくアパートは強制解約だし、
身分証の有効期限も切れている。
身内でもいれば良いが、とうの昔に縁を
切ったきりなので連絡先も分からない。
そこに手持ちの数千円だけで放り出された場合、待っているのは路
上生活しかないし。
厳密に言えば、アパートの解約時に部屋にあるエロゲやら、ギャル
ゲやら、その他の
グッズが人目につくという心配もあるけど、
業者の人と会うわけでもないしな。

つまりはまだ詰んでないって事か？
働くのはイヤだけど、この世界の
金の価値次第じゃ帰ってからウハウハ？
でも、さすがにシンフォニア相手に迷惑料請求する訳にもいかない
しなぁ…。
幼女だし…神様だし…頼んだらくれそうだけど、人として何か終わ
る気がするな…。
でも働くのもなぁ…。

「そういえばシンフォニア様？」

「はいっ！」

ちなみにシンフォニアは泣き止んだ後、
とても元気になった。うん！やっぱり幼女は元気が一番だ。

「何故、僕は召喚されたのでしょう？」

「え…？だから私が魔法で…」

「いや、え～っと、そうじゃなくて僕が選ばれた理由ですよ。僕のいた世界には６０億もの人間がいたのですよ？」

そう、この質問だけは聴かねばならない。
もしかしたら俺の中には勇者だの救世主だのになる【特別な才能】が！
あるのかもしれないのだ！！
秘められた魔力あったりとか
前世がアポロ○アスだったとか
実は一子相伝の暗殺拳の使い手とか
聖闘衣を修理できたりとか
実は死神とか
実は特質系の念能○が使えたとか
中には楽して稼げる才能があるかも
知れない！

「さぁ…？なんででしょう？」

……ソウデスカ……。
タダノ　イツモノ　ビンボウクジ　デスカ…。
全力で落ち込む俺がいた…。

「でっでもっ！イツキ様は凄いですよ！
〈災厄の覇王〉も倒せるくらいだし！
何より私に触れるのですからっ？
これはもう立派な勇者様と言っても
良いのではないでしょうかっ！」

幼女はニートを慰めた！
…あまりこうかはないようだ…

ん？待てよ？

「普通はシンフォニア様には触れないのですか？」

「そうです！生身の人間は神格を持つ精霊王に触れる事など出来ないはずなのですっ！」

☆☆異世界に来て知った自分の才能！☆☆

特殊スキル【幼女に触れる】

…ダメだ…ある意味はアリかも知れないけどダメだ…。気分で言うとｏｒｚだ…。こうなると選択肢は多く無い！

1．精霊王国で五年間養ってもらう
2．人間の住む土地まで行き、地味に働く
3．シンフォニアをひたすら撫でる

……3…かな？……

いやいやいやいや！ダメダメダメダメ！
都条例に引っ掛かるから！惜しいけど！
１も精神的に無理だ！幼女と幼児の国で
３０過ぎのオッサンが養って貰うとか！
人としてダメすぎる！残り物は２…なのか？
一応、シンフォニアに確認してみるか？
３でもＯＫなのかも知れ無いしな！よし！

「イツキ様はとにかく凄いので、勇者様だと思いますっ！！」

確認するよりも前に決まっちゃった？
めっさキラキラしてるよ？目が！
笑顔が眩し過ぎる……。

「いや、僕なんて…」

「勇者様だと思いますっ！！」

「あのね…」

「勇者様だと思いますっ！！」

最後の力を振り絞って抵抗するも、
無邪気な幼女に敵う訳はなく…
俺の下界行きは決定した。

【第6話】分析するニート（後書き）

かなり文章にブレがありますね…
読みにくいと思います…すいません

次回こそは主人公が旅立つハズ！

【第7話】旅立ちのニート（前書き）

『章管理』ボタンを押すと
ｉＰｈｏｎｅのブラウザが落ちるので
タイトルに付けました。

ここからが【第一章】スタートです。
また断片的にやりたい事、世界設定を
まとめて起承転結を大まかに書いて
スタートした為に、作品紹介に若干の
違和感を覚えたので修正しました。
スイマセン…

とりあえず、完結目指して頑張ります。

【第7話】旅立ちのニート

そんな訳で俺は今、森の中だ。
どこまで歩いても森の中だ…
文学的に言うなら
『木のトンネルを抜けると、そこは森だった…』
ネット風に言うなら
『どうしてこうなった』である。
さて５００回目くらいの後悔と共に記憶を
紐解いてみるとしよう。

幼女で女王で精霊で神様なシンフォニアは、
あろう事か俺を『勇者』認定してしまった。
その純粋で期待と尊敬に満ちた眼差しを前に
「帰れるまで5年間養って下さい」なんて
言えるワケないよね？
そもそも幼女と幼児に言えないけどさ…
そんな事…。

そして俺の口から出た言葉は
「じゃあ、帰れるまで勇者っぽい事でも
しちゃおっかな…アハハハハ…」
※棒読み
である。大切なので、もう一度言おう…

『ど・う・し・て・こ・う・な・っ・た！』

その後、シンフォニアの王宮で休ませて貰い
（普通に立派な城だった）次の日にシンフォニアや、従者や、近衛

兵の方々に見送られて
今に至る。ちなみに、旅立つにあたっては
伝説の剣や支度金は一切渡されていない。
幼女に金の催促なんで出来ないよね？
大人だもん…オッサンだもん…。
唯一、シンフォニアが頬にチューしてくれただけだ。

ん？そう！ほっぺにちゅーだ！
「光の精霊王の祝福ですっ！」と
真っ赤な顔でチューしてくれたのだ！
頬にチューくらいなら捕まらないよね？
あの時のシンフォニアは実に可愛いかった。
元の世界に戻れたら、幼女が出てくるアニメも
好き嫌いせずに見てみよう…。今なら
「幼女は最高だぜっっ！」とか言えそうだ。
ゲフン…ゲフン…。

ちゅーして貰った後に下界に降りる際は、
やたら大きい水晶に触れるだけで良かった。

シンフォニア達のいる精霊王国は結界に
守られているらしく、
出るにも〈転送〉の魔法が必要らしい。
召喚はダメだけど〈転送〉はＯＫとか…
以外と適当だな…この世界…。
五年後にはお迎えが来るらしいけど…。

さて、そんな訳で俺は今、森の中だ。

え？〈災厄の覇王〉？
なにそれ？そんなのいた？

分かってる…
ヤツについて語らないといけない事は…
今まで巧みにスルーして説明を避けて
みたけど…そろそろ限界の様だ…。
俺が召喚された原因を作ったヤツ。
シンフォニア達…精霊を恐怖の底に
叩き落とした〈災厄の覇王〉
ヤツは俺が召喚された時に、俺の下で死んでいた…正確には靴の裏
で死んでいた。
つまりは、とても小さい生物だ。

黒く硬い殻に覆われた体
無数の足を駆使した、常軌を逸した動き
高らかに空を駆ける2枚の羽

まぁ、魔法が効かないとか…
（精霊は物理攻撃力がとても弱い）
精霊の力を探知して追いかけてくるとか…
それなりにハイスペックな生物らしい。
ロープレで言うと〈はぐれメタ〇〉？

でも俺からすれば……
……ぶっちゃけただの……

……ゴキブリだった…。

史上初！ゴキブリを倒す為に召喚された
勇者がいた！…って言うか俺だった…。

ちなみに〈災厄の覇王〉ことゴキブリに
襲われた近衛兵さん（見た目5歳児）は
生きていた。（当たり前だ！）
必殺フライングゴキブーを顔面にくらって
気絶したらしい…
こちらも気が付いた後に泣きじゃくるので
あやすのが大変だった…

そんな訳で森にいるのだ！
説明終わりっっ？
こんなバカな説明をしているが、
実は状況的には結構マズいのだ。
まず食料が尽きかけている…
俺が持ち込んだ食料は
・ポテチ1袋
・ビーフジャーキー1袋
精霊は『食べる』という概念が無かった為
食料の補充は出来ていない。
水に関しては川を発見したので問題ない。
（ビールを飲み干して空き缶を水筒にした）

夜間を過ごす為に火が必要だったが、
世間の逆風にも関わらず〈喫煙者〉という
ジョブを持っている俺はライター常備だ。
もし〈喫煙者〉でなければ火も起こせなかったかと思うとゾッとする…
皆も異世界に召喚された時の為に
〈喫煙者〉のジョブは持っておこうね！
増税反対？

個人的力説はさて置いて、精霊王国を出て
既に二日が立っている。
もうそろそろ日が暮れるので、三日目の晩が
近づいている事になる。
このままでは〈災厄の覇王〉を倒した勇者は
最初の村に辿り着く前に餓死してしまう…

はてさて…そろそろイベントでも…

「※※※※※※※※！」

…起きた様である…

【第8話】疾走のニート（前書き）

若干グロい話になります。
苦手な方は御遠慮下さい。

【第8話】疾走のニート

「※※※※※※※※※※！」

その声は俺の前方から聞こえてきた。
よく見れば、もう日も落ちかけているのに
前方は僅かに明るい。
どうやら火を炊いているみたいだ。
いや～、危なかった！
どうやら餓死する前に人里に出たみたいだ。
でも、まだ油断は出来ない！
なぜなら、この世界の〈人間〉が俺と同じ
〈人間〉である保証などないからだ。
最悪、見た目からして違う可能性もある。
でもな～、この世界で生きて行くなら、
コミュニケーションとか不可欠なんだよな～。
やばい！気楽に考えてたけど、知らない人とコミュニケーションなんて俺の一番苦手分野だ！
でも、このままじゃ餓死確定だしな…。

そこまで考えた所で、急に前方から金属音がした。
とりあえず近くの木蔭に隠れる。
社会人経験があるとは言え、俺は人見知りなのだ！シンフォニアの場合は幼児だったから
良かったものの、
いきなり普通の人とか無理だって！
だってニートだもん！

（向かって来るのは……女…？）

暗がりでよくは見えないが、小柄な人型の
生物が見えた。頭からボロ布を纏っている
せいで推測でしかないが、人間の女に見える。
足には枷の様な物と、そこから伸びる鎖と、
繋がった鉄球の様な物が見える。
表情は見えないが、鬼気迫るものを感じる。

（おいおい…未知との遭遇一発目がこれかよ！）

女（？）は息を荒げながら足を引き摺るが、森の道に足を取られて
転ぶ。
それでも前に進もうと、枷についた鎖を
必死で手繰り寄せていた。

（うわっ！なんだ？この状況？どうする？
とりあえず助けるか？）

意を決して出ようとした俺の足は再び止まる。女の来た方向に人の
気配がしたからだ。

（今度は…男？）
次に現れたのは男…だった。
女を探していたのか息が荒い。

（人間…だよな？）
俺の目はおかしくなったのだろうか？
見る限り男は胴体に頭、腕、足をくっ付けた
俺と変わらない造形をしている。

異様なのは、その格好と体格だ。
男は素肌の上に革のプロテクターの様な物を
着ている。更に右手には刃渡り１ｍはあろうかという刃物。さらに
はマッチョと言うには
あまりにも猛々しい肉体をしている。
ぶっちゃけると、かなり怖い。
イメージで言うなら、某世紀末覇者の下っ端だ。更に身長がおかし
い！俺の身長は１８０ｃｍある。
現代日本では、まあ高めの部類だ。
だが目の前の男は明らかに俺よりデカい！
って言うより、明らかに２ｍは越えている！
熊か？こいつは熊なのか？

俺が男の異形に目を奪われていると、男は
怯えて立ち上がる事も出来ない女の目の前に
立ち、その剣を傍らに突き立てた。

（おいおい…まさか…）

俺の嫌な予感は外れる事を知らない。
それは異世界でも共通の確定事項だったようだ。そう…男は泣き叫
ぶ女の服を引き裂き始めた。つまりは…レイプだ…。

あまりの事態に俺の足は逆方向に向いていた。勝手に…物音を立て
無い様に、慎重かつ早く。

これだけは言っておく！
俺はレイプなんか嫌いだ！
借りて来るＡＶだってレイプ物なんか借りた事もない。両者の合意
の上の、そういうプレイなら百歩譲ってアリとしよう。

でも男が腕力に任せて、女の子の心まで陵辱して良い訳がない。

…それでも、この状況は無いだろう？
こっちは只のニートだぞ？
日頃ろくに運動なんかしてないし！
襲っている奴が、俺よりも確実に弱そうなら
助けにも出たかも知れ無い。
でも、ありゃ熊だぞ？しかもアホみたいに
切れそうな刃物まで持ってんだぞ？
しかも、俺はこの世界に来たばっかだ！
本来なら来るべきじゃ無かった被害者だ！
つまりは本来なら、この道を通るハズのない人間だ！
それに歩き詰めて筋肉が痛ぇーんだよ！
誰も俺なんか見ちゃいない！誰も俺を責める事なんか出来ねーんだ！
文句があるなら、そいつが助けりゃ良い！
あの女にだって借りがあるワケじゃない！
クソクソクソクソクソクソクソっ！
ついさっきまで、もっとお気楽そうな
ファンタジーのノリだったじゃねえか！
クソがっ？

って…なんで足止めてんだ？オレ…
ざけんなよ！とっとと逃げろよ！
見つかったら、殺されるかも知れねーんだぞ？動けよ！死にたくねーよ！怖いんだよ！

待て待て待て待て待て！待てって！
ふざけんな！そっちは戻る道じゃねーか！
アホか！止まれ！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！
震えてんのに、何でそんなに急いでんだよ！
足音出してんじゃねぇよ！
ふざけんなよっっっ！
止まれ止まれ止まれ止まれ！クソっ！
なんだよ！なんだってんだよ！
何させるつもりだってんだよっ！
チクショウ！ふざけんなよっ……

……チクショウ…。

もう足は止まってくれなかった。
体に力は入らない。今にもその場にヘタりこみそうなクセに走るスピードは落ちない。
木の枝が顔を引っ掻いても、足が縺れても、
俺の足は止まる事なく前に進む…。
顔だって涙と鼻水でグシャグシャだ…。
俺は何をしているんだろう…。

枝を掻き分け、男の背後に飛び出た俺は

男の後頭部へ渾身の力で拳を叩き込んだ。
男は不意をつかれたせいか、その場に屈む。
その隙に俺は男から女を引き剥がし、男と女の間に体を入れる。
男は服を引き裂くのに夢中だった。
挿入もしていなかった。
間に合った…のかも知れ無い…。

「※※※※！」
「※※※※※※！」

男も女も、何かを叫んでいるが分からない。
ひょっとして言葉が通じない？なんで？
シンフォニアとは普通に話せたのに？

何も持っていない右手で男を制し、
後ろを振り返ると女と目が合った。

…そんな状況じゃなかったのに…

右手の近くを温かい風が通った気がした…
振り返ると…
俺の右手の親指と、人差し指が…

…無かった。

【第8話】疾走のニート（後書き）

と、ここまで自分で読み返して見て
気がついたのですが

第二話あたりが、かなり好きな小説と
似ていた…と言うか似すぎていた事実に
気がつきました。
どうやら、その小説のその部分を読んだのが
かなり前だったので失念していた様です。
自分自身のいい加減さ、記憶力のなさが
招いた事態とも重々承知しております。

この様な拙い作品を見て下さった皆様、
また恐れ多くも「お気に入り登録」して
下さった皆様には申し訳ない気持ちで
一杯です。

既に当該部分には若干の修正を加えました。
今後クレーム、指摘等が来る様であれば
大幅な改編、打ち切り削除も検討したいと
思います。
読んで頂いている皆様には、重ねて申し訳ありません。
どうか今暫く、拙作にお付き合い下さい。

【第9話】瀕死のニート（前書き）

グロ展開継続中です。

【第9話】瀕死のニート

その瞬間はスローモーションだった。
勿論、実際に時間が遅くなった訳じゃない。
まるで、そう…事故に合う直前に世界の
流れが急に緩慢になるような感覚…。

生まれてから三十年と少し…。
怪我やら何やら、色々あったが苦楽を共に
してきた俺の右手。
そこにある筈の親指と人差し指は
あるべき場所に…無かった。

断面に見える残された骨…
ピンク色の筋肉繊維…
白い筋の様な物…

それらは、ある事実を俺に伝えていた…。
そう…切り取られたのだ…と…。

そこに思考が到達した瞬間、世界は一気に
加速していた。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

俺の指から大量の血が噴き出す。
あまりの激痛に、見ていた筈の怪我にすら

思考が追いつかない。

（え？…え？…なんだこれなんだこれ）

叫ぶ事しか出来ない俺に、男は容赦なく
拳を、蹴りを浴びせて来る。

（ちょ…待っっ…）

ガッ！ガスッ！グシャッ！

二発、三発…男の攻撃は休む事なく続く。
当たり前だ。自分に殺意を持って刃を
振るった男が、指が飛んだくらいで
攻撃を緩める筈がない。
俺は、どれ程平和ボケしているのだろう？
怪我を心配して貰えるとでも思ったのだろうか？
止まる事の無い男の暴力。
とてつもなく莫大な真実味を持って、
俺は死を覚悟した。

次の瞬間、自分の上に柔らかモノが
被せられた気がした。
おそらく頭にも尋常ではない怪我を
しているのだろう。目に血が流れ込み、
視界は殆ど効かない。
微かに見えたソレは、女が纏っていた
ボロ布だった…。

（ま…さ……か……）

言う事を効かない身体を無理矢理動かし、
目の血を拭い、頭をもたげる。
俺の上には女が覆い被さっていた。

「（何してる！退け！…退いてくれ？
頼むから…退いて…くれ…）」

必死に叫ぼうとするも、血が気管支に
とめど無く流れ込み、俺の叫びは
声にならない。

ガッ！？

急に俺の上から、僅かな重みが消えた。

（おい？…おいっ！…）

無様に地面を這いずり、辺りを見ると
女が転がっているのが見えた。
そこから先は更に無様だった…
俺は声にもならない雄叫びを挙げ、
立ち上がった所へ一撃を喰らった。
薄れゆく意識の中、もう一人誰かが来た
気配がした。

……パチッ…パチッ…

何かが弾ける音がする…
ゆっくりと目を開けようとすると
右手から、全身から激しい痛みを感じた。

「（ガハッ…がああぁぁぁぁ？）」

口から叫び声が出そうになるが、
喉にも激痛を感じ、声にすらならない。
転げ回ろうにも、起き上がろうにも
身体はピクリとも反応しなかった。

息すら満足に出来ない。
痛みに耐えながら呼吸を整え、何とか目を
開ける。
目の前には少女の顔があった。
いや、正確には少女であろう…顔だ。
少女の顔には、とても大きな傷があった。
古傷だろうか？少なくとも、ここ数日の
怪我には見えない。
残った部分の造形が、この女がまだ少女で
ある事を伝えていた。
纏っているボロ布からして、先程の女かも
知れ無い。

少女は何も喋らない。
ただ…泣いていた…。
少女の顔は、俺を覗き込んでいる。

彼女の流した涙は、その頬を伝う事なく
俺の顔に降り注いでいた。
どうやら体制的に、俺は少女に膝枕を
されている様だった。
視線を動かすと、俺は手足を縛られており
少女も手を縛られて、その先は近くの木に
結ばれていた。
近くには人間だったであろう肉塊も転がっており、焚き火の近くに
は数人の男が見えた。
状況から考えて、この肉塊は男達の仕業だろう。

少女はただ泣いていた。
たまに口が動き、「※※※…」と音を発する。
何かを言っているのか、意味の無い呻き声
なのかは分からない。
ただ、その悲しい瞳には俺に対する謝罪と
罪悪感に満ちていた。

「（大丈夫…大丈夫だから…）」

上手く伝えて、頭でも撫でてやりたいと
思った。でも、相変わらず俺の身体は
指一本動かない。声も出ない。

（ダセェ…マジでダセェな…俺…）

もう分かっている。自分ではこの少女を
救えない事を…。
もう分かっている。自分はこのまま死を
待つだけだと言う事を…。

俺の頬を、生温かい何かが伝った。
次の瞬間、俺の頭は地面に叩きつけられた。
気が付かない内に、男達の一人が近くにいた様だ。
男は俺を蹴り飛ばし、少女の髪を掴んで
引き摺って行く。

「や…や…やめ…ろ…止めてく…だ…さ…い
おね…が…い…しま……す……」

俺は残された力の全てを使い、声を出す。
喉の痛みなんて、構っていられなかった。
だが、そのあまりに細い声は男に届かない。
口の中は泥と血の味しかしない。
男に引き摺られる女と目があった。
その瞳は、変わらず悲しみと謝罪を
湛えていた。

（やめてくれ…そんな目で見ないでくれ…
俺は君を助ける事が出来なかったんだ…
それだけじゃない…一度は見捨てて逃げたんだ…
きっと…心の何処かで、この状況を
君のせいだと思ってるんだ…汚い奴なんだ…
だから…そんな目で見ないでくれ…
頼むから…）

また意識が遠くなる感覚がした。
きっとこのまま死ぬのだろう。

だが、目を閉じると違和感を感じた。

（身体が移動している？）

男達と少女が視界から少しずつ遠ざかる。
どうやら引き摺られている様だ。
男達の仲間だろうか？
もう、どうでも良い。俺は死ぬのだ。
それは絶対的に、圧倒的に動かない事実。
俺は閉じゆく意識に、再度身を任せた。

「※※※※※※※※！」

誰かが声を発し、何かが光った気がした。

「※※※※※※※※！」

もう一度、声が聞こえて何かが光る。

不意に身体の痛みが軽くなり、身体を起こす。先程まで何かを呟いていたソイツは…

「大丈夫か？」

…言葉を喋った。

【第9話】瀕死のニート（後書き）

まだグロ展開続きます。
次回は逆襲編です。

【第１０話】復活のニート

「大丈夫か？」

ソイツは喋った…
身体の痛みが消えた事、言葉が通じた事。
どちらの驚くべき事態すら
その驚きの前には霞んでいた。

ソイツは形こそ人だった。
確かに二足歩行生物だった。
スラッとした長身に金髪をなびかせ、
素肌の上に赤いベスト
脛の途中までしかない、動き易そうなズボン
腕には厳つい手甲をはめている。

問題は一つだ！いや正確には二つか？
ソイツの顔は……
……ウサギさんだった。
いや、訂正しておこう！
とても精悍な顔付きのウサギさんだ！
きっとイケメンのウサギさんがいるなら、
この目の前のウサギさんだろう。
そして、その素肌は白いモッフモフの毛で
覆われていた。
そのウサギさんは、俺の手に巻かれた
ロープを解いている。

（これが…獣人…？）

俺はシンフォニアから受けた説明を
思い出していた。シンフォガルドには
人間の他にも人間に似た種族がいるらしい。
その一つが『獣人』だ。
彼等は人間よりも優れた身体能力を誇り、
人間には使えない様なスキルを持つらしい。
その反面、繁殖力が弱く数は人間の十分の一
程らしい。耳や尻尾などの身体の一部が獣の
特徴を持つ者が『半獣人』。顔や身体全体が
獣な者を『獣人』と呼ぶとかなんとか。

「どうした？獣人がそんなに珍しいか？」

呆気にとられた俺の視線が不快だったのか、
ウサギさんは不機嫌そうに話しかけてきた。
どうやら、このウサギさんは日本語が
喋れるらしい。

「すいません…気分を害したなら謝ります…」

俺の謝罪にウサギさんは鼻をならす。

「近くを通ったのだが、精霊共がヤケに騒ぐのでな。来てみれば、
死にかけの人間がいた…。悪いが勝手に治癒の魔法と、通訳の魔法
をかけさせて貰ったぞ？私は旅の途中でな…この国の言葉は知らん
のだ。言葉が通じなければ、お前が何者か分からんしな…」

（治療？通訳？魔法？さっきの光の事か？）

見てみると傷はかなり塞がっていた。
よくよく考えれば、身体を起こせているし、
視界も回復している。
右手の出血も止まっている様に見える。

「助けてくれて有難う御座います…魔法って凄いんですね…」

「何を言っている？お前も光の精霊の『加護持ち』だろう？」

…何を言ってんだ？このウサギさん？
…ダメだ！そんな場合じゃないっっ？

「有難う御座いました！じゃあっ！」

そう言って駆け出そうとしたオレを
ウサギさんの声が引き止める。

「何処へ行く？折角拾った命だろう？」

「そうですね…感謝しています…」

「お前は、あの人間達に殺されかけたのだろう？」

「…そうですね…」

「それでも戻る…と？」

「…そうみたいですね」

「何故だ？」

「さあ？」

「報復か？」

「…多分そうなんでしょうね」

「足が震えているぞ？」

「そうですね…力も入りませんね…怖くて…」

「泣いてるぞ？」

「ええ…止まりませんね…ビビってますから…」

「治癒魔法も、一度で全てを治す訳じゃない
無理をすれば傷が開き、今度こそ死ぬぞ？」

「あ～…あのセリフはこういう時に使うのか…」

「……？」

「いや、好きな小説のセリフなんですよ…」

「ほう…？」

「つまりは…ベスト○ンディションだ！ってね…死ぬ前に一回はリアルで言いたかったんですよね～…」

「…私に助けを求めようとは思わないのか？」

「命の恩人に助けられた命を、僕は不義理にも今から捨てようとしています。その上、命を賭けてくれ…なんて言えませんよね…？でも、それでも、もし頼みを聞いてくれるなら……逃げてくる女の子を逃がして貰えませんかね？勝手ですけど…」

「…良いだろう…」

恐らく遺言としては、そこそこ格好良いセリフが言えただろう。
涙と鼻水、膝と声の震えがなければ完璧だったと、我ながら思う。
それでも俺は駆け出した。
まだ身体は痛い。力も入らない。
恐怖に足は震える、涙も止まらない。
もちろん、これから死ぬのも怖い。
無駄にウサギさんと会話をしたのだって
少しでも生きている時間を伸ばしたかったの
かも知れ無い。
本当に俺って奴は汚い人間だな…。
それでも行かなきゃな…。
あの娘が、あんな瞳をしたまま犯され、
死ぬかも知れ無い状況を傍観する…。
そんな事は出来ない…。
目覚めが悪いんだよ…。
睡眠大好きなニートを殺す気か？
まぁ、今からほぼ間違い無く死ぬけどなっ！

後ろでウサギさんの声が聞こえた気がした。
そして…背中に何かが触れたかと思うと、
俺の身体は光に包まれた…。

【第１０話】復活のニート（後書き）

まさかの逆襲ならず…ｏｒｚ…
次回こそ逆襲編です。

【第１１話】逆襲のニート（前書き）

相当グロいです。
苦手な方は、絶対見ないで下さい。

【第１１話】逆襲のニート

（何だ…？）
何かが背中に触れた直後、俺はバランスを崩していた。一瞬、身体が光ったかと思うとまるで階段を踏み外した様な感覚に襲われた。そこまでの圧力を感じた訳じゃない。だが、俺の身体は急に襲ってきた違和感に完全に平衡感覚を崩されていた。

（…とっ…とぉっ？）
何とかバランスを立て直そうと、俺は勢いに任せて、右足で地を蹴った。単純に急ブレーキをかけるより、勢いでバランスを保とうとした…それだけだった…それだけだった筈だ…。

（……へ？）
俺の身体は飛んでいた…。
正確には地面を蹴った勢いで、超低空飛行していた。目測でも２０ｍはあった筈の距離は一瞬にして消え去り、俺の横には少女を地面に組み伏せている男が呆然とした顔で俺を見上げている。俺は左足で着地していた。あまりの事態に次に踏み出す予定だった右足は上がったままだ。

「らあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ？」

俺は勢いに任せ、右足を振り下ろす。
格闘技経験なんか無い。ガチの喧嘩なんか高校の時が最後だ。不格

好に繰り出された蹴りは男の側頭部を捉える。夢中で放たれた攻撃は、鈍く渇いた音を響かせ男の顔を地面に叩きつけた。

（やっ…た？…違う？まだっ？）

蹴り足を振り抜いたせいで崩れた体制を立て直し、俺は男の頭を勢いよく踏みつける。先程、失敗して死にかけたばかりだ。いつまでも平和ボケはしていられない。念入りに男の頭を踏みつけて少女を見る。少女は何が起こっているのか分からない…と言った顔をしていた。勿論俺だって分かってない、何故俺の足は化け物じみた跳躍をしたのかも。圧倒的に体格差のある相手が地面に転がっているかも。それでもやらなきゃならない。
焚き火を挟んで呆気に取られていた男達が、
刃物を手に立ち上がっているのだから。

「おいっ！おいっっ？」

惚けている少女の頬を軽く叩き、彼女を現実に引き戻す。

「走れっっ？」

俺は駆けて来た方向、ウサギさんがいる筈の方向を指差して叫ぶ。しかし、少女は俺の袖を掴んで動かない。そして、目に涙を貯めて必死に首を振る。

「…あっ…あっっ…」

少女は何か言葉を絞り出そうとしているが、
彼女の口からは呻く様な声が出るばかりだった。たが、その目は「（逃げて）」と叫んでいる様に見えた。

（クソッ！なんでだ？このバカ？）

そもそも俺は何故、少女が逃げてくれると思ったのだろう？最初に出会った時に、少女が逃げていたから？自分を庇った少女が逃げない可能性に全く気がつかなかった？

「…クソがっ！…やったらぁぁぁぁっ？」

俺は傍にあった刃物を手に立ち上がった。恐らくは、地面に転がっている男の物だろう。鞘は付いていない。完全な計算違いに、俺の思考は焦げ付きかけている。だが、止まる事も引き返す事もできない。殺人者は待ってはくれない。だが不覚にも、俺の思考は再び速度を落とす。

（軽い？なんで？…これじゃハリボテ…）

持ち上げた刃物の異常な軽さに動きが止まる。その間は一瞬だった筈だ。

（マズイっっ？）

気が付いた時には、男が目の前で刃物を振りかぶっていた。

「あぁぁぁっっっ？」

死の恐怖に声が出る。思わず目を瞑る。

……しかし男の刃物は、いつまでたっても俺の身体に届かない。ハリボテの様に軽い俺の

握った刃物の先に、僅かに重みを感じる。

恐る恐る目を開けた先には……鼻から額にかけて、刃物に貫かれた男が…死体がぶら下がっていた。

焚き火に照らされ、あまりにも鮮明に見えるソレ。
先ほどまで生きていた人間。
貫かれた傷口からしたたる、とろみを帯びた血液。
掻き分けられた肉片。
細やかに収縮し、微細な運動をする筋肉。
衝撃で飛び出した眼球。

その光景に、俺の胃液は一気に逆流した。
無意識に抵抗するも、あまりの勢いに口の端から溢れ出し、口の中に酸味が広がる。俺は刃物から伝わる感触に耐え切れず、思わず手を離した…離してしまった。

「殺…した…？オレが…？なん…で？」

意思に反して身体は、くの字に折れ曲がる。
口の中に貯め込んだ胃液は、一気に流れ出る。
心の中にドス黒い何かが広がる。
頭は血が上っているのか、血の気が引いているのか分からない奇妙な感覚を訴える。
思考はどんどん閉じて行く。
完全に時間が止まった様な感覚。
俺は自然と膝を地に着いていた。

どれ位の間、そうしていただろう？
不意に腹に温かみを感じて意識が戻る。
目線を下に動かすと…俺の腹から刃が生えていた…。

「っっっっが？……ぎゃぁぁぁっ？」

痛みを堪えた訳じゃなかった。
ただ今日だけで何度も感じた圧倒的な死の感覚。
それにつられて見上げた先には…俺の指を切り落とした男が、勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「ガキィ…ふざけやがって…」

（ガキ？俺は３０過ぎだってぇの…あ～あ…もう…なんでかな…くやしいなぁ…）

急速に冷えた思考、本日三度目の死の覚悟。

だが、俺は見てしまった。
本日二度目…俺と男の間に割り込んだ少女を…。

男が刃を振りかぶった瞬間、俺の中で何かが弾けた。

俺は少女を飛び越え、左手で男の頭を鷲掴みにすると地面に叩きつけていた。
頭から血を流し、不様に地面を這いずる男。
俺は刃物を拾い上げる。

これからする事に心は何も感じていない。
俺は刃物を振りかぶる。
一瞬男と目が合い、男の顔が恐怖に引き攣るのが見えた。
（だから…？）
心の中で呟き、俺は刃を男の頭へ振り下ろす。
何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、
頭を庇う腕も、最早その要を為していない。
それでも単純作業は終わら無い。
何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も…。
だが、途中で刃物がスッポ抜けた。
どうやら返り血が付いた事と、右手の指が2本程無くなっていたので、握りが甘くなっていたみたいだ。まぁ、良いや…。
俺は男の上に跨り、拳を振り下ろす。
何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も…
右手が痛むが関係無い…まだ足り無い…。

背中に軽い衝撃を感じて振り向く。
そこには俺の背に縋り付き、泣いている少女がいた。
目が合った…そう認識した時、また俺の意識は薄れていった…。

【第１１話】逆襲のニート（後書き）

書いている内に、とんでもないグロ方向へ…
　ｏｒｚ…
またバトルシーンの難しさと、他の作者様の偉大さが、大変良く分かりました。
かなり読みにくかったと思います。
申し訳ありません。

【第１２話】説明のニート

…夢を見た。
暗闇の中で一人きり…。
俺は一人で座り込んでいる。
手に暖かい何かが触れた…。

何の気無しに、俺は左手を見る…。
そこにあったのは…臓物。

俺は嗚咽と共に、立ち上がる。
周囲には見わたす限りの臓物…。
俺はたまらず、口からゲロを吐く。

全てを吐き出し、閉じていた目を開く。
ゲロに塗れたはずの手。
だが、そこには剥き出しの眼球、千切れた耳、
よく分から無いピンクの固まり…そして指があった。

俺はハッとして手を確認する。
そこには、指を切り取られた右手があった。

声にならない叫びと共に、
俺は勢い良く起き上がった。
身体中に纏わり付く汗が気持ち悪い。
多分、人生で最悪の夢だったと思う。
途中から夢だと分かっていた。
夢であってくれと願っていた。
たが夢から覚めても、俺の右手には

親指も人差し指も…無かった…。

改めて周囲を見る。
どうやら、ここは屋内みたいだ。
俺はベッドに寝かされていた様で、
上には白いシーツが掛けられていた。
ふと左手に重みを感じる。
視線を移すと、そこには少女がいた。
普段の俺なら情けない声を挙げて、
自分のパンツの中でも確認しただろう。
だが、あまりに強烈な悪夢を見たせいか、
俺は冷静に事態を受け止めていた。

気を失う直前に見た顔だ。
視線が合った時、安堵、喜び、悲しみ、怒り、
怯え、そして謝罪を瞳に込めていた少女。
その彼女が今、ベッドの脇に膝をついたまま
俺の手を握って寝ている。
最初に見た時は、ボロ布を頭から被っていた。
助けに入った時は暗かった。
膝枕をされていた時は、意識が朦朧としていた。
明るくなった今、俺は初めてハッキリと彼女の姿を見ていた。
半分だけではあるが、かなり整った顔立ち。
背中まで伸びた黒髪は太陽の光を孕んで、
ほんの僅かに紫がかって見えた。
大きく傷ついた顔
痩せ細った華奢な手
パサついた髪
それらのパーツは少女の今までの人生が、
決して幸福なモノでは無かった…と…俺に伝えていた。

（どうやら、まだ生きているみたいだな…。
ベッドに寝ている事を考えると、男の仲間に
捕まった訳でも無いのか？窓から差し込む光からして、時間は経っ
てる…らしい…し…。）

とりあえず思考を纏めていると、ドアの開く音がした。身構えそう
になるが、俺は動きを止める。
恐らくは、俺をここに運んだ人物。
その人物に当たりがついていたからだ。

ドアを開けて現れたのは…予想通りウサギさんだった。

「…驚いたな…まさか二日で目覚めるとは…」

ウサギさんは暫く入り口で固まっていたが、ドアを閉めてテーブル
横の椅子に腰掛けた。

「二日…ですか…取り敢えず、有難うございます」

（時間が経っているとは思ったが、二日も寝てたのか…。それにし
ても…このウサギさんは…どれだけお人好しなんだ？手当てもして
あるから、これもこのウサギさん？いや、人じゃないから…おウサ
ギ好し？）

「礼ならその娘に言うのだな…」

「へ？」

予想もしてい無かったウサギさんの言葉に、
俺は間の抜けた返事を返していた。
どうやらウサギさんは闘いが終わった後、
約束通り、律儀にも少女を逃がす為に来たらしい。
だが、少女はウサギさんを敵だと思ったらしく俺を背に庇って動かなかったそうだ。
そしてウサギさんは少女に理由を説明して、手当ての為に俺を近くの村に運び込んだ…
と言うのが顛末らしかった。
俺を運んでいる時も、村に着いて宿屋に入る時も、治療している時も、少女はウサギさんを完全に信用していなかったのか、俺の傍から離れなかったらしい。

（本当に…この娘は…）

俺は少女の頭を撫でた。
優しく、起こさない様に…。
それは、まだ目覚めない少女への精一杯の御礼と感謝の証だ。
よく考えてみれば、あの場で少女が飛び出さなければ、俺は死んでいたかも知れない。

暫く少女の頭を撫でた後、俺は手を止めて再びウサギさんに視線を戻した。彼には聞かなければならない事が山の様にある。

「改めて御礼を言わせて下さい。僕は遠野樹と申します」

「トオノ・イツキ？変わった名前だな？私はビットだ」

ウサギさんに言われたくねぇよ？
…と心の中でツッコミを入れたが、口には出さなかった。このウサ

ギさん、ビットさんには二回も命を救われている。少々の無礼に目くじらを立ててはいられない。

「手当てもビットさんがしてくれたんですよね？容体としてはどうなんでしょう？」

「ああ、傷は塞いでおいた。だが血を流し過ぎていたからな…目覚めるかどうかは賭けだった。まぁ、もう問題ないだろう」

ビットさんの言葉に俺は身体を見回す。
そう言えば、起きた時から身体の痛みが殆ど無い。
指を落とされ、体中には打撲、骨折だってしていたハズだ…腹には深々と刃が刺さった…。本来なら死んでいる方が当たり前…それが…二日で大丈夫…？

だが、確かに細かい傷は消えていた。
指こそ戻っていない（感覚がない）が、
右手と腹に巻かれた包帯以外、ケガの痕跡すら見当たらない。

「ビットさんは医師の方ですか？何をしたら、こんな無茶苦茶な治り方…」

「もしやと思ったが、お前は自分が光の精霊の『加護持ち』だと知らないのか？」

「籠持ち？」

なんだそれ？籠なんか持ってねーよ？
アレだな…湯川センセー風に言うなら、
ハッハッハッハ…さっぱり分からない…だ。

そんな事を考えるていると、ビットさんは
溜息を深く…それはもう日本海溝よりも深く、呆れた様に吐いてから説明をしてくれた。

まず『加護持ち』とは、精霊の力を使役する
魔法を使える存在らしい。
精霊には六つの属性があり、『加護』を受けた精霊の種類で使える
魔法の方向性が決まるらしい。

火の精霊は炎と熱を
水の精霊は水と氷を
風の精霊は風と雷を
土の精霊は土と金属を
闇の精霊は〈負の力〉と死、そして契約を
光の精霊は〈正の力〉と命、そして無属性を
司るらしい。

闇の〈負の力〉とは、対象物を弱体化させる力
逆に光の〈正の力〉とは対象物を強化する力

火、水、風、土の属性は、相剋、相生の関係にあるが、光と闇は相剋のみの関係で、他の属性とは相生しない。

個人の魔法の力量は『加護』を受けた精霊の力で決まり、高位の精霊の『加護』を受ける程に強力な魔法を使える。

精霊は下位　、中位　、上位の順に力が強くなり、更にその上には
『神格持ち』つまり神様レベルの最上位種がいる。

『神格持ち』は個体として存在し、それぞれに名前を持つらしい。
『加護』は生まれつき授かる先天的な物や、
訓練、儀式によって授かる後天的な物があり、メカニズムは完全に
解明されていない。

先天的な物の中には『祝福』と呼ばれる力を授かる場合があるらし
く、有史以来、数人しか確認されていない『祝福持ち』は例外無く、
世界に多大な影響を与えたとか。

ビットさんは中位の光精霊の『加護持ち』で
俺の体を治すのに〈治癒〉の魔法を。
賊に向かって行く俺に〈力〉の強化魔法を。
使ったらしい。
なるほど…どうりでモヤシっ子の俺が、
熊やら世紀末覇者の下っ端を相手にして
生きているワケだ…。
ちなみにコミュニケーションを取るのに使った〈通訳〉の魔法は、
全属性共通で使える〈初歩魔法〉との事。

あの場に来たのも、光の精霊が騒いでいたから。
ビットさんを誘導する様に…。

ビットさんの説明終わりっっ！
淡々と喋られたから、どこが重要かサッパリ分からなかった…。

だが引っ掛かる事がある…。
『加護持ち』は魔法を使える。
『祝福』？『神格』？『名前』？
連想されるのは、あの幼女…。

ゴキブリを打倒する為に、この世界に俺を
呼び寄せた…勝手に『勇者』にした…神様。
そして説明義務を怠り、１９９Ｘ年みたいな世界に送り出したシンフォニア…。
旅立つ俺に伝説の剣も、金も持たせなかった光の精霊王…。
（もしかして…）
その考え…願望が頭を過る。

「ビットさん？もしかして俺にも魔法って使えるんですか？」

「おそらく…だがな…だが光の精霊の反応からして間違いないハズだ。『加護持ち』は見た目で分かるものではない。だが精霊はお前を護ろうとしていた様に感じる。ならばお前が『加護持ち』でないハズがない」

「教えて下さい！どうやって…」

「簡単な事だ…指に魔力を込めて、虚空に文字を書く。できるだけ内容を正確に…だ。
さらには内容を自ら復唱する事で、精霊にイメージが伝わり易くなる。
そうする事で魔力は精霊に捧げられ、あとは鍵となる言葉を唱えれば精霊は応えてくれる。」

「魔力って…」

当たり前だが、俺は生まれてから一度も魔力なんか持った事はない。

（前提条件からアカンのかいっ！）

俺は思いっ切り肩を落とす。
小さなお友達も、大きなお友達も分かってくれるよね？無双は男の子の夢だよね？
まぁ、さっきの説明聞いた限りじゃ、仮に使えても治癒者、ヒーラーみたいだけど…

「どうした？試さないのか？」

ビットさんは手本を見せる様に、その指を空中に踊らせる。光を帯びたその指は、まるでペンライトの軌跡の様に空中に複雑極まりない文字だか、紋様だかを描く。

（ハイハイ…何書いてんだかもサッパリ分かんねーよっ？）

魔力…と言われてから、嫌な予感はしていた。こちらの世界に当たり前が、俺にとっての当たり前と同じな訳じゃない。ならば文字なんて当然分かるワケねーっ！…って話だ。

「どうした？簡単な事だろう？…スマン…
もしかして字が書けなかった…か？」

ビットさんは首を傾げていた。
クソッ！イケメンの上に可愛いだと？
しかも今、素で言ったよね？
若干哀れんだ目したよね？

「いや～ちょっと僕の知ってる文字と違ったみたいでぇ～…アハハハ…」

「ならば問題ないな。大事なのは、お前の頭の中で文字として形を

成しているか…だ」

（何？その適当な定義？だからって日本語でもＯＫな訳じゃないだろ？しかも魔力なんて使えねーんだよ！こっちは！少しは空気読めや！このクソウサギ！）

なんと言う事でしょう。
外面の丁寧な言葉とは裏腹に、匠は心の中で命の恩人をクソウサギ呼ばわりし始めてしまいました…。
って誰が匠だっっ！
こうなったら、やってやんよ！
俺が結婚してやんよ？（？）

俺は空中に指を踊らせ、文字を書く。
もちろん日本の文字だ！しかも漢字だ！
精霊っ！読めるモンなら読んでみやがれっ！

……結果から言うと…

思ったより頭良かったみたいです…

精霊さん…

【第１２話】説明のニート（後書き）

やっと要たる〈魔法〉の説明です。
グロ展開から、お気楽展開に戻すとか
どんな神業？とか思いましたが、
自分なりに頑張りました。

かなり説明臭くなりましたね。
スイマセン…ｏｒｚ…

【第１３話】再生のニート（前書き）

本日の時間別ユニークにて、アクセス０が無い事に気を良くして再度の投稿です。平日では初達成かも知れません。拙作を支えてくれている皆様、本当にありがとう御座います。

【第13話】再生のニート

この世界の精霊さんは、頭が良いらしい…。
いや、元いた日本で精霊がいた訳じゃないけど…。

俺が空中に書き綴った文字はオレンジ色の光を放ち、当たり前の様にそこに浮かんでいた。ビットさんは顎が外れそうな顔をして、俺を見ている。
ウサギの顎が外れるかどうかなんて知らんけどね。
っつーか…マジで日本語でもＯＫなの？

「お前…今…魔力を使わなかったろう…」

眉間に作ったシワを揉みながらビットさんは呆れた様に呟いた。
曰く、魔力を込めた指で文字を書く場合、魔力と精霊の力が混ざり合って絶対に単色にはならないらしい。

「まさか…お前『祝福持ち』か…？」

ビットさんは再び、今度はマリアナ海溝よりも深い溜息をつき、信じられない物を見た様な顔をしている。更に曰く、魔力を使わずに精霊の力だけで魔法を行使できるのは『祝福持ち』だけらしい。

「…えーっと…そうなんですか？」

俺は何となく心当たりがあるものの、確信が持てない為に曖昧な返事しか出来ない。だがビットさんは……壊れた…。

「お前は馬鹿か？馬鹿なのか？『祝福』だぞ？しかも、主神たる光

属性の『祝福』だ！ああ…何て事だ！しかも『祝福』が与えられるなんて、少なくとも高位クラス…下手すりゃ『神格持ち』か？どうなんだ？おい？お前は自分に力を与えた存在について何も知らないのか？魔法の使い方が分からない？そんな訳があるか？この世界に生きていて、今の今まで知らなかった？後天性じゃあるまいし…後天性？待て待て待て！後天性で『祝福』？そんな儀式も修行も例外も、まるで聞いた事ないぞ？そんなモノ発見されたら、世界のバランスなんか簡単に壊れるじゃないか？何だ？お前何をした？」

びっとは　　こんらんしているようだ。

言えない…言えないよ…ビットさん…。
ゴキブリを倒す為に異世界から召喚されて、
御礼に幼女に『ほっぺにちゅー』してもらう事が
『祝福』の条件じゃないっスかね？
なんて死んでも言えません…。
だってアンタ…目が怖いんだもん…。

流石にビットさんの声が五月蝿かったのか、
少女が目を覚ました。ナイスタイミングだ！
少女よっっ！
少女を起こしてしまったせいか、ビットさんは自重してくれた様で、
それ以上追求して来なかった。

少女は、まだ目が覚めないのか、惚けた様に
俺を見ていた。

「ありがとね…」

俺は少女の頭を左手で撫でる。

少女は急に目を見開いたかと思うと、
顔を赤らめて俯いてしまった。
これで「キモッ」とか言われてたら、
俺は死にたくなったに違い無い…。
何回か死にかけて、やっと生還した所だけど…。

ふと目を先程の文字に移すと、そこには何も無かった。首を傾げた所にビットさんが再び口を開く。

「さっき…何と書いた？見た事の無い文字だったが…」

「ああ〈治癒〉ですね、傷が治るって意味ですよ？」

「もう一度書いて見ると良い…」

「…？」

俺はビットさんに勧められるままに、空中に
〈治癒〉の文字を書く。

「声に出してみろ…」

「えーと…〈ちゆ〉」

言われるがままに〈治癒〉の文字を発音する。変化は突然起こった。
俺の書いた〈治癒〉の文字が、同じくオレンジ色の光で丸く囲まれた。まるで精霊が「ＯＫ！」もしくは「承認！」とでも言っているかの様に。
オレンジ色の文字が消えたかと思うと、俺の左手が光り出す。

「腹でも触ってみるが良い…」

ビットさんに促されるまま、俺は自分の腹を触る。光は腹を発光させたかと思うと、そのまま消えてしまった。腹に違和感は無い。

今のが魔法？いやいやいやいや、ねーよ！

もっと…こう…効果音とか！激しいエフェクトとか！イノケンティ〇スとか！もっと…こう…あるよね…？

半信半疑で俺は包帯を外す。

…治ってた……

…超完璧に治ってた…

…薄いギャランドゥまで完璧に再現してる…

いや、まだ分かんねーし！

包帯の下、外すまで見てなかったし！

そう！俺は治って行く様を見た訳じゃない！

魔法ってのは…もっと派手で格好良いヤツだ！ビットさんは、呆れ顔で溜め息ついてるし…。

きっと不発だったに違いない。

少女の開き過ぎな目も気になるけどっ！

俺は再度、空中に指を走らせる。

書いた文字は〈再生〉。

無くなった指は『怪我を治す』概念の〈治癒〉では補え無い。ならば『生体の一部分が失われた場合、その部分が再びつくりだされる

現象』〈再生〉ならば…魔法の真偽も確かめられる筈だ。
先程と同じ様に〈再生〉の文字が光に囲まれ、左手に光が宿る。俺はその光を右手に押し付けた。
どうだ？生えるモンなら生えてみやがれ！
…いや生えるなら生えてほしいんですけどね…。

「なっ…」

驚きを口にしたのはビットさんだった。
そりゃそうだ。俺が右手に光を押し付けた途端に地震が起きたのだ。
窓の外は薄暗くなり、突如吹き出した暴風が建物を大きく揺らす。
晴れていた筈の外からは雨音と、雷の音が聞こえて来る。

…だが、それらは三十秒と続かずにピタリと止まった。それ程の自然現象が僅か三十秒…だ！ビットさんも少女も完全にフリーズしている。俺だって勿論フリーズしていた…が！

「いだだだだだだだだっ！」

突如右手に感じた痛みに、フリーズしている場合じゃなかった。
慌てて包帯を外す。
このままじゃ折れるっ！

折れちまうっ！

……折れる？何が？

包帯を解くと……あった…。

「おかえり…」

俺は人生で初めて、右手に話しかけていた。
生き別れの家族にでも再会したかの様に…
戻ってきた、親指と人差し指を抱きしめて…
泣いていた…。

【第１４話】決意のニート

俺は泣いている…。
別段、涙腺が弱い訳じゃない。
そりゃ、哀しい映画を見たら泣く。
賊と対峙した時も怖くて泣いた。
仕事が辛い時にも一人で泣いたし、
好きだった女に捨てられた時も泣いた。
だが…嬉しくて泣いた事は、物心ついてから
は無かったと思う。
今まで過ごした人生は、お世辞にも幸運とは
言えなかった。

だから俺はこの世に産まれ出た時以来、
三十年ぶりに喜び、泣いたのだろう。
涙は暫くの間、俺の頬を伝わり続けた。

一頻り泣いた後、ビットさんと少女が部屋に
いたままだった事に気が付いた。
焦って顔を上げる…が、心配は杞憂に終わった。
ビットさんは口を開けたまま、フリーズ中。
少女も唖然としている。
俺は何だか気恥ずかしくなり、少女に
戻って来た右手をヒラヒラして見せた。

それでも少女は暫く固まったままだったが、
突然俺の腹部に顔を埋めてきた。
少女の肩が震え、腹部に重みと、息遣い、
そして湿り気を感じる。

少女は泣いていた…。
元の世界にだって何人いるだろう…
もしかしたら、いなかったかも知れない。
俺の為に泣いてくれる人…。
俺の為に命を賭けてくれる人…。
俺はこの時、この少女の為に出来る事なら、
何でもしたいと思った。

「本当に有難う…心配かけてゴメンね…」

俺は泣いている少女の頭を撫で、自分本来の
口調で話しかけた。対外用の体裁を取り繕
った言葉では無く、自分の言葉…。
それは心からの信頼と親愛の証だ。

少女は俺が声を掛けると暫く息を整えていたが、
急に勢い良く起きあがった。
何ごとか？と思ったが、理由は直ぐ分かった。
俺はビットさんの治療を受けた時に、服を
脱がされていた様だ…。
今の俺は所謂「パンツ一丁！」…。
俺を覆っていたシーツも、
今は腰の付近までズリ落ちている…。
つまりは真っ裸の一歩点前だ…。

少女は顔を真っ赤にして狼狽えていた。
思わず笑いそうになるが、いかんせん俺も
恥ずかしくなってきたので服を着る事にした。

服は破けたり血の跡も残っていたが、
キチンと折り畳まれていた。
俺は服を着ると、改めて少女に向き直った。
「コホン…助けてくれて有難う。俺は遠野樹。君の名前を教えてくれるかな？」
少女は何かを言おうとしたが、少し俯き悲しそうな顔をする。
（あれ？通じてるよな？ビットさんとは話せてるし、〈通訳〉の魔法を使った後は、あの賊の言葉も分かったんだけどな…もしかして…）
俺は少し躊躇ったが、疑問をぶつけてみる事にした。
「…ひょっとして…喋れない…の？」
俺の問いかけに少女は悲しそうに微笑み、
そしてコクンと頷いた。
「原因は…恐らくこれだな…」
俺と少女の遣り取りを黙って見ていたビットさんが会話に入り、少女の腕を取って言った。
「…これは…刺青？いや痣か？蛇の鱗みたいにも見えますけど…」
少女の手首には巻き付く様に、黒い何かがある。
「これは…契約の闇魔術だな…娘よ…その髪色に、この闇魔術の〈

契約〉…お前はジャンヌ王国の者だな…」
少女はビットさんの問い掛けに少し逡巡したが、小さく頷いた。
「どういう事ですか？」
「…半年前まであった国だ…今はもう存在しない…な…」
ビットさんは、苦々しい顔で語り始めた。
ジャンヌ王国とは、半年前に戦争で滅んだ国だそうだ。シンフォニガルド東部の小国で王は義に厚く、国民は勤勉で素養があり、また優秀な剣士を排出する国家として有名だったそうだ。事実、ジャンヌ王国出身の英雄の話は童話として愛され、ジャンヌ王国で製造された優秀な道具はシンフォガルド全域で使われているらしい。
ジャンヌ王国は国土こそ小さい物の、経済大国として栄え発展していた。
ところが一年前、ジャンヌ王国の隣国カンダで戦争が起こった。大陸北方の軍事大国のチューゴ帝国、ロッツ皇国が手を結び、進行したのだ。
ジャンヌ国王は見兼ねて周囲の国と同盟を結び、カンダの救助に向かったらしい。戦いは熾烈を極めたが、半年後ジャンヌ王率いる連合国は、両大国を徹底させる事に成功した。
停戦協定の後、ジャンヌ王はカンダの救済に回った。至る所で炊き出しを行い、焦土と化したカンダに支援を惜しまず、ジャンヌ王国の名声、善行は大陸中の知る所となった。
だが半年前、それは突如として起こった。チューゴ・ロッツがジャンヌ王国に奇襲をかけたのだ。
宣戦布告も行わないまま…
ジャンヌと両国の間にはカンダがあったのに…

まるで素通りでもしたかの様に…。
ジャンヌ王国の首都は、両国の１０００名を超える魔法大隊により
一夜で滅んだそうだ。
そして敗戦後、ジャンヌ王国の領内にはカンダの人間が現れた。首
都から離れた地方に住む領民達は首都が陥落した事など知らず、カ
ンダ人を歓迎したらしい。だがカンダ人は「戦勝国」を名乗り暴虐
の限りを尽くした。
カンダは裏切ったのだ。
助けて貰った恩も忘れて…。
そしてジャンヌ王国では
男は殺され…
女は犯されてから殺され…
金品は奪われ…
国土も奪われ…
生き残りの人間も捕まり「奴隷」として
売られたと言う。
そして「奴隷」となった者には、主人の命令に絶対逆らえない〈契
約〉の闇魔術がかけられた。

「…じゃあ、この黒いのが…その闇魔術だと？」

「ああ、間違いないだろうな…〈契約〉の闇魔術で『奴隷』契約を
結ばされた者は、主の許しが無ければ口を開く事も許されない…と
聞いた事がある…」

少女を見ると、辛い記憶を思い出したのか、
肩が震えていた。

だが、俺は怒りに震えていた。
治ったばかりの手には、爪が食い込み

血の流れる感触がした。

（なんだ…それ…何でこの娘がそんな目に合うんだ…？メチャクチャ良い娘…だぞ？何で…？カンダの連中も…助けて貰ったんだろう？『奴隷』…だと？人間を…売った？なんだよ…何なんだよっ！じゃあ顔の傷もその時か？ふざけんなよっっ！
女の子だぞ？まだ子供だぞ？これからが楽しい時だぞ？きっと良い恋だって出来た筈だ！幸せになれた筈だ！こんなに良い娘なんだ！
それがっ！それがっっ……）

「それなりに力のある闇魔術師がかけた様だな…私の力では解…」

「ざっ……けんなぁぁぁぁぁぁぁっっ？？
〈解呪〉ぅぅぅっっっっっ？？？」

俺は指を走らせ叫んでいた。
ビットさんが何か言いかけていたみたいだが、
そんなモン知ったこっちゃ無い。
そんなバカな事があって…許されてたまるかっ？
そんな現実なんか認めるものかっ？
それが現実なら…そんなモン俺がブチ壊してやる？

そして俺の手は少女の腕を取った。

【第15話】癒しのニート

俺は怒りに任せて叫んでいた。
出来るかどうかなんて分からない。
それでもやる。
絶対にやってみせる。
もし出来ないならシンフォニアにでも
やらせてやる！

日本にいた時、神に縋った事は何度もあった。
でも…何も起こらなかった。
救われない事が続いて、報われない事が多すぎて…
俺は神様なんか信じなくなっていた。
この世界に来た時だって、シンフォニアの
言葉なんか信じていなかったかもな。
俺は死にかけても…祈らなかった。

だけど…今、俺は祈る。
この世界にいるという光の精霊に…だ…。
この少女を縛る鎖を、断ち切ってくれ…と。

俺の掴んだ少女の手首は、光に包まれていた。
急に腕を取られて驚いた彼女だったが、
あまりの眩しさに今は目を閉じている。
まるで…神に祈りを捧げる様に…

変化は直ぐに起こった。
腕を掴んだ俺の手の隙間から黒い靄が立ち始める。

それらは２０ｃｍ程上に登ると霧散して行く。
暫くすると靄は消えて、光も消えた。
俺は慎重に、ゆっくりと少女の腕を解放する。
少女の息を呑む音が聞こえた気がした…。
俺の手が完全に離れる。

そこには……白い手首…彼女本来の華奢な、
今にも折れそうな、綺麗な手首があった。

「目を開けてごらん？」

俺は目を瞑ったままの少女に、出来るだけ
優しい声をかけた。
少女はゆっくり目を開ける…。
恐らく怖いのだろう。
〈奴隷〉か〈奴隷ではない〉か、
彼女の人生の分岐点が目の前にあるのだから…。

目を開いた彼女は動かない。
やがて、ゆっくり顔を俺に向けた。
その瞳には大粒の涙で溢れ返り、
顔は破顔してクシャクシャだ。

「あ…ありが……ま…す…わた…わたっ…
わたしは…フ…フィ…ア…フィア…でっ……」

途切れ途切れな声だったが、
彼女の言いたい事は分かった。
ただ、ここで無理に話をさせるのは、
男らしくない…そんな事を考える俺は

やっぱりオッサンなのだろうか？

「フィア…だね…辛かったね…もう大丈夫だよ…」

そう言って、俺はフィアの頭を優しく撫でた。
実際には、俺には彼女の人生なんて分からない。
でもな？俺は知ってんだよ。オトナだからな。
女性は共感を求める生き物だ。
だから分からなくても、分かろうとするのが
正解だ。
そして何よりも自分が辛い時、悲しい時、
苦しい時、死にたい時…根拠なんか無くても
「大丈夫」と言って貰える事の温かさを、
俺は知っている。
ツイてない人生送って来たからな？
それくらいは知ってるっつーの！
だから…人生でもギャルゲーでもエロゲーでも…
俺のこの言葉の選択は、間違って無いと思う。

俺の言葉を聞いて、暫くしゃくりをあげたフィアは
堪え切れなくなった涙が落ちると盛大に
声をあげて泣き出した。
出したくても出せなかった…声をあげて…。
俺は、そんな彼女を抱き寄せた。
せめて今くらいは、誰かの温もりの中で
泣いて欲しかった。
フィアは抵抗する事もなく、俺の胸に顔を埋める。

（ゴメンな？こんな地味なオッサンの胸で…）

心の中で、そう呟いた。

暫くすると、フィアは泣き疲れたのか眠ってしまった。俺は彼女を起こさない様、ベッドに寝かせてビットさんと部屋を出た。もう五日も、まともなメシを喰っていない俺の腹は限界だったのだ。

部屋を出ると短い廊下になっていて、その先に階段が見えた。どうやら木造建築みたいだった。

シンフォニアの王宮以来、初めての建築物。そう言えば、異世界に来て初めての一般の建築物でもある。

期待と不安に階段から見下ろした先は……意外と普通だった。

入り口に面した広いロビー（？）に丸テーブルが並び、カウンターもみえる。作りからして中世後期のヨーロッパ？実際に見た事ないけど…。

いやフィアやビットさん、賊の連中を見てたから何となく想像はついてたけど…。まあ、それでも召喚された先が核戦争後の放射能汚染の世界とか…人間が某ハリウッド映画のアバ〇ーとか…電車に乗ってカンパネルラと旅する世界とか…そんな世界で無かっただけ良しとしよう。

テーブルに着くと、恰幅の良い女性が

注文を取りに来てくれた。
女性は俺の姿に驚いていたが、ビットさんが
注文をすると厨房らしき場所へ入って行った。
後で聞いた話だが、瀕死で運び込まれた俺を
見て、助かるとは思っていなかったらしい。
葬儀屋の手配も済ませていてくれたらしく、
二日で回復した俺にシャレにならない位
驚いた…との事。

料理を待つ間はビットさんと話をした。
俺の事は説明が面倒だったので
記憶喪失だ！という事にしておいた。
ビットさんは釈然としない様だったが、
まだ彼の事を知らない分、手札は切れない。
解剖させてくれ！…とか
異世界人は二回死ね！…とか
妄想乙！…とか
ただの人間に興味はありません！
未来人、宇宙人、異世界人は～…
なんて言われたら目も当てられない状況になる。
あれ？最後のはＯＫなのか？
召喚されて涼宮なんとかさんの条件に入った？
ちなみに俺は消失を２０回位しか見てない
ライトファンですよ？。
せっ…聖地になんか行った事ないんだからねっ？

俺の事は話せなかったが、ビットさんは
自分の事を話してくれた。
ビットさんは旅人らしい。
元は何処かの国の騎士団にいたらしいが

数年前に除隊して、世界を見て周っているそうだ。
俺やフィアがいた場所は〈精霊の森〉と言って、
フィアと出会った付近より奥は、
神聖な場所として信仰の対象らしい。
ビットさんは光属性の魔術師として、
巡礼も兼ねてこの土地を訪れたそうだ。

暫く話していると、料理が来た。
見た事のない食材もあったが、空腹の為か
どれも美味しそうだった。
勢いでかぶりつく…が三口目くらいで、
ある事に気がつく…。冷や汗が出たが、
騙っている訳にもいかないので
恐る恐るビットさんに尋ねてみた。

「ビットさん…俺、金持ってないんですけど…」

びっとは　ちんもくしている

そう！俺はこの世界の金を持っていない！
賊を倒しても手に入れてない！
レベルアップもしていない！
現実はゲームでは無いのだ！

（…どうするフィアを連れてトンズラするか？
いや、命の恩人にそれは…無い…よな？）

だが考え込む俺に、ビットさんは溜息をついて

小さな麻袋を渡してきた。
置く時に金属音がして、少し重そうだった。
「知っている。悪いと思ったが所持品を調べさせて貰ったからな…で、ソイツはお前の取り分だ」
「取り分？」
ビットさんは、俺をあの場で応急処置した後
賊の荷物、つまりは襲われていた商人の荷物を
漁ったらしかった。
意外とちゃっかりしてんな…このウサギ…。
ついでにフィアの足枷の鍵も見つけてくれて
外してくれたらしいけど…。
「山賊を倒したのはお前、商人も身元なんか
分からん。つまりはお前の金だ！まぁ治療費、
宿代位は貰っておいたがな？」
なるほど…ロープレで悪人を倒すと金が入るのは
こういうシステムらしい。
善意の第三者ってヤツだ。
まぁ、厳密には原始取得者だけど…。
元の持ち主知ってる時点で
「善意」じゃないけど…。
……日本じゃないから良いか！
袋の中には金貨が一杯に入っていた。
この世界の貨幣価値は分からないが、
これならフィアにも腹一杯御馳走できそうだ。

満腹になるまで料理を漁り、部屋に戻る事にした。
フィアは起きているだろうか？
彼女にはまず、御飯を食べて貰おう。
きっとロクに食べて無いに違いない。
それから、まだしてあげたい…
させて欲しい事もある。
きっとまた泣かれるんだろうけど…。
そんな事を考えながら部屋に戻る時、
俺は頭の隅で、もう一つ考えていた。

（召喚されたのがエロゲを買った帰り道じゃ
無くて良かった…本当に良かった…）

…と。

【第１６話】修行のニート

「…行くよ……フィア…緊張しなくて良い…俺に…任せて…」

「……はい…お願いします…イツキ様…」

二人きりの室内は枕元のランプの炎が揺らめき、
少し怪しい雰囲気を作り出している。
ベッドに腰掛けるフィアは緊張しながら
目を閉じる。
異性に触れられるのが恥ずかしいのだろうか…。
ほんのり赤みの射す頬…。
俺はフィアを怖がらせない様…優しく頬を
すくい上げた。

「…んっ…」

フィアの口から吐息が漏れる。
俺に触れられ、一瞬肩が強張る。
だがフィアは抵抗する事も無く、
俺にその身を委ねた…。

「……はいっ！もう良いよ？」

俺はフィアに声をかけ、鏡を渡した。
緊張しながら鏡を覗き込むフィア。

その目からは、また涙に溢れている。

そう！俺がしていたのは〈再生〉の魔法だ。
決して１８禁的なアレでは無い。
事実を有りの儘に述べるだけで、こんなに
イヤらしい表現になるとは…活字って怖いね！
ノベルだけにっっ？……すいません…
調子に乗りました…。

そんな訳で、俺はフィアの治療をしている。
本来なら俺が目覚めた日、食事を終えフィアが
目が覚めたら直ぐにでもしたかった。
だが、自分でもよく分かっていない魔法と言う力。
そんな力を、いきなりフィアの顔に行使するのは
躊躇われた。
そこでビットさんに頼み込み、魔法の基礎を
教えて貰い、実験・検証をしてから今に至る…
という訳である。
あれから、もう一週間ほど経っている。

予想通りと言うか、何と言うか…
またもやフィアは泣き崩れ、今は俺の膝の上で
顔を埋めている。
そして、またもや俺はフィアの頭を撫でて、
あやしている…というのが今の状況だ。

最初、ビットさんに頼んだ時は断られると
思っていたが、すんなり了承された。
ビットさん曰く、

「そんな力を考え無しに振るわれたら叶わん…
それに、『祝福持ち』の師匠になるのは
やぶさかではない…」

との事らしい。ちゃっかり授業料は取られたけど…
ビットさんとの修行では色々と分かった。

まず、俺の力は万能ではない事。
光属性だったので期待はしていなかったが
〈火炎〉〈雷〉〈土壁〉〈氷塊〉など
他の属性に連なるものは全てアウト。

防御魔法も基礎を教えて貰った限り、
〈対炎〉〈対雷〉などケースに併せた展開が
求められる。
基本的に魔法は一人一属性なので相手の
属性を見抜く事が重要らしいが、
魔方陣には使う魔法に対応した色があるので、
そう難しくはないらしい。

また身体強化魔法、治癒魔法は直接対象に
触れなければならない。
効果は対象を絞るほど高まる。
例えば〈強化〉ならば全体に能力が上がるが、
〈力〉を単独強化した場合は、〈力〉の方が
効果は高い。
強化魔法の継続時間は約一時間。
（腕時計で計った）
治癒魔法は治してしまえば、効果は定着する。

俺の『祝福持ち』としてのアドバンテージは三つ。
魔力を使わずに精霊の力を直接使える。
（ＭＰ無限大）
同じ魔法でも『加護持ち』よりも効果が高い。
魔方陣を描く時間が短かい。
三つ目に関しては、どうやらこの世界は
『単語』が日本ほど発達していない事が原因らしく
俺の場合『祝福持ち』として、精霊とのリンクが
高いのも一因だとか。

無属性魔法は、良く分からなかった。
光属性自体がレアで無属性魔法自体も
資料が少なく、よく分かっていないらしい。
（光属性で中位精霊の加護を持つビットさんも、
充分に凄い存在らしい。）
だが、これに関しては一つだけ心当たりがあった。
恐らくは今後の切り札になる筈だ。

ビットさんは、俺の修行が終わると旅立って
行った。また大陸中を巡るそうだ。

俺の修行中、フィアには養生して貰った。
何ヶ月もまともに食事を取っていなかった
フィアは痩せ細り、食事を取っても直ぐに戻した。
俺は出来るだけ消化の良い物を摂らせ、
宿屋の女性従業員にフィアの体を拭いて貰い、
柔らかいベッドで休んで貰う事で半年間の
疲れを取って貰った。
（一応、毎日〈癒〉の魔法もかけていたが、
体調が一気に回復する事は無かった。）

フィアはその待遇に、しきりに遠慮していたが、
何とか納得してくれた。
（フィアはずっと「いつか治療費も、食事代も、
宿代も必ず支払う」と言って譲らない）

さて…そんな訳でフィアの体調も良くなり、
ケガも治した訳だが……

改めて見ると……この娘……
滅茶苦茶カワイくね？
いや、何と無く気が付いてはいたけど…
しっかり養生して、髪も洗って、ケガも治して…
背中まで伸びた髪はサラッサラだし…
目は大きいし…瞳なんか宝石みたいに綺麗だし…
顔立ちは整ってるし…
リアルでこんな美少女とか…
こんな娘…2次元でしか見た事ないぞ？
労働奴隷だったって話してくれたけど、
顔にケガして無かったらと思うと……。
いや、それは言うまい…。

そんな事を考えていると、顔を上げたフィアと
目が合った。
本当によく泣く娘だ…。
俺はハンカチ位、用意しておけば良かった…
と思ったが、持っていない物はどう仕様もないので
手でフィアの涙を拭う。

「イツキ様…イツキ様…有り難うございます…
この御恩は必ず…必ずっ……」

「良いよ？フィアが俺に恩を感じてくれている様に俺もフィアに恩を感じているからね？
だから…とりあえず『イツキ様』って止めない？」

「…イツキ様の御言付けでも…それだけは
出来ませんっ？」

もう何度目のやり取りになったろう…。
フィアは俺を『イツキ様』と呼んでくれる様になった。
それ以来、いくら言っても止めてくれない。
いや、別に良いんだけど…恥ずかしいんだよっ！

ここ数日、体調が回復しつつあるフィアからは色々と話しを聞かせて貰った。
話すのが辛い事もあったと思う。
だが今後の俺やフィアの身の振り方を決める上で、俺は聞かなければならなかった。

フィアは元々、ジャンヌ王国の地方に住む商人の娘だったらしい。
だが、ジャンヌ王国の首都陥落後、侵攻して来たカンダの連中に街は襲われ、両親は殺されてしまったそうだ。
フィア自身も、その時捕まり顔に大きな傷を負った。
そしてフィアは労働奴隷として売られ、

この半年間、地方を転々としていたらしい。
俺と出会った時は、新しい主人に買われて
山道を歩かされている時に、山賊に襲われた
そうだ。
フィアを買った商人は、山賊に真っ先に
殺された…と話してくれた。

フィアの話を聞いている時、俺は罪悪感と怒りに
おかしくなりそうだった。
だが、辛いのはフィアだ！と自分に言い聞かせ、
フィアが話している時は、口を挟まなかった。
その上で…これからすべき事を考えなければ
ならないのだから。

「じゃあ…フィアは、これからどうしたい？」

俺は涙を拭う手を止めて、
フィアを正面から見つめて尋ねる。
俺がしたい事と、フィアがしたい事は別問題だ。
彼女が祖国に戻りたい…と願うなら、
俺はそうするつもりだ。
彼女は俺の所有物ではない。
まだ、出会って一週間ばかりの…他人だ…。
だから選んで貰わなければならない。
彼女自身で…彼女の未来を…。

「…御迷惑でなければ、イツキ様の傍に置いて
下さい…私には、もう帰る場所も…会いたい人も…
何も誰もありません…。どうか、お役に立たせて
頂けないでしょうか？」

フィアは答えを決めていたかの様に、迷い無く
しっかりとした口調で答えた。

「…分かった…でもフィアが俺から離れたくなった時には言ってくれな？出来るだけの事はするから…」

俺の答えにフィアは少し躊躇ったが、コクンと
頷いてくれた。

我ながら、少し卑怯な答えだったと思う。
だが、人の気持ちは変わる。
今、フィアが俺に感じている恩を利用して、
縛り続ける事は俺には出来ない。
せめて…この娘が俺の傍にいる間は、幸せに
過ごして貰おう…。

俺はフィアに言う事無く、心に誓った。

余談？
宿屋の女性従業員（オバさん）に、フィアの体の傷がヒドイと怒られた。どうやら、フィアの体を拭いている時に見たらしい。
俺は従業員に、光属性の魔術師だと説明し、
手伝って貰った。
具体的には…目隠しをして、フィアには脱いで貰い
〈治癒〉の魔法をかけた手を従業員の
オバさんに誘導して貰った…。どんな変態プレイ？
とは思ったが、他に良い方法が無かった。
案の定、翌日からフィアと、少し気まずくなった…。

余談？
恐らく余談で済ませて良い話では無いのだが…
目覚めた日…俺は数日ぶりに鏡を見た。
この世界に来てから初めてだった…。

え～……なんだか……若返ってました。

鏡を見た時の、俺の反応は想像に任せます。
声にならない叫びをあげて、宿屋中の人に
怒られました…。

召喚された時、体が痛かったのも…
シンフォニアが「お兄ちゃん」て呼んだのも…
賊の男が「ガキ」って言ったのも…

まさか伏線だったとは…
見た目２０～２２そこそこのイツキです…。
（２２歳の時、交通事故で負った傷が消えてます）

もうっ！異世界だからって、
何でもして良いワケじゃないんだからねっ？

ダメです…キレが出ません…ｏｒｚ…

【幕間】フィアの回想（前書き）

今回はフィア視点の話です。
長くなったので二部に分けました。

【幕間】フィアの回想

『あの方』は突然、現れた。
私の体の…命の…心の恩人だ。
私はこの先、あの方にどれだけの物を
お返しすれば良いのだろう？
きっと一生かけても返せない…。
私をこの半年間捕らえて離さなかった暗闇から
力ずくで引き揚げてくれた大きな手…。
あの日の事は鮮明に覚えている…。

あの日、私は新たな主に買われ馬車の脇を
歩かされていた。
祖国が滅び、〈あいつ等〉の『ジャンヌ人狩り』に
街が襲われてから半年。
私は捕まった時に負った傷のせいもあって
労働奴隷として売られていた。
奴隷として過ごした日々は、
辛いなんてもんじゃなかった。
口すらきかせて貰えない…。
失敗しても、失敗しなくても鞭で叩かれる…。
ご飯なんか三日に一度、それも凄く貧しい
食事だったと思う。
周りには、ケガや病気で死んでしまう同胞が
たくさんいた…
その時の私は彼等がとても羨ましかった…。
奴隷は自由を許されない…。
契約に縛られた私達には、自分で命を断つ事も
許されなかった。誇りを持つ事すら許され

無かったのだ。
そんな中、言葉は話せなかったけど、
助けあって仲良くなった年下の女の子もいた。
少ないパンを分け合って、仕事も手伝いあった。
私に向けてくれる笑顔が、とっても可愛い
女の子だった。
ある日、彼女が雇い主と数人の男に連れられて行った。
次の朝になって彼女は帰って来た…死体で…裸で。
雇い主は私達に彼女を捨てて来る様に命じた。
私は泣き喚きたかった…その女の子の為に…
知らない彼女の名前を呼んであげたかった…。
でも〈契約〉のせいで出来なかった…。
雇い主を殺す事も…。
私はそれ以来、全てを諦めて過ごした。
もう何もいらない。もう私には何もない。

だから私を買った商人の馬車が襲われた時
少しホッとした。

（ああ…これで終われる…やっと死ねる…）と…

でも私は直前になって怖くなった。
あれ程待ち望んだ死が堪らなく恐ろしくなって、
私は逃げ出した。
でも私の足には鎖と鉄球が繋がれていて、
すぐに山賊に追い付かれてしまう。
私は神を呪った…。
信心深かった両親には怒られるかも知れない。
それでも…私の純潔がこんな形で奪われ、
そして殺される…なんて悪い夢以外の何だと

言うのかが分からなかった。
私の小さな頃からの夢は「幸せなお嫁さん」
ただ、それだけだったのに…

そんな時…『彼』は現れた。
暗闇の中から現れて、私を襲っていた男を
殴り飛ばしてくれた。
でも私を庇った背はとても震えていて、
少しだけ頼り無かった。
そして『彼』は大怪我をしてしまう。
手を切られ、男に何度も殴りつけられた。
私は夢中で『彼』の上に被さったけど、
山賊に蹴られて、地面に転がってしまった。

その後、気が付くと私も『彼』も捕まっていた。
火に照らされて見た『彼』は、私とそんなに歳が
離れていない青年に見えた。
私は申し訳ない気持ちで一杯だった。

（どうして、この人は震る程に怖い思いを
してまで、私なんかを助けに来たのだろう…）

そんな事を考えると、涙が止まらなかった。

（せめて、この人だけは助かって欲しい…）
心から…そう思った。

『彼』は私の膝の上で、何か言おうとして
いたけれど、私には分からなかった。
私は必死に謝ろうとしたけど、やっぱり言葉は

出なかった。
私が山賊の男に連れて行かれる時にも、
『彼』は何とか体を動かそうとしていた。
私は視線で『彼』に訴えた。
ゴメンなさい…
どうか逃げて下さい…
ありがとう…
そんなに一杯…伝わる訳も無いのに…。

私は髪を引っ張られ、服を引き裂かれた。
でも、それで良いと思った。
私がこの男の相手をしている間に、『彼』が逃げられるのならば…と…。

私は、つい先程まで呪っていた神に祈った。
『彼』の無事を…『彼』の逃亡を…。

目を閉じた私は、風を感じた。
目を開けた先には彼がいた…。
彼は私に触れようとしていた男を蹴り飛ばす。
私は呆然としてしまっていた。

（何で？あんなに大怪我をしたのに…何で？
そんなに震えて、涙まで流して…何で？）

私の意識は『彼』によって現実に戻された。
どうやら顔を叩かれたらしい。
『彼』は私に何かを指差し「逃げろ」と言ったが、
そんな事はどうでも良かった。

「（逃げて！お願い！私の事は良いから！）」

私は叫んだ。
山賊一人に敵わなかった『彼』が二人相手に
勝てるなんて想像も出来なかった。
勿論『彼』には届かない。

『彼』は叫び剣を取った。
そして…一人の顔に剣を突きたてた。
だが、彼は止まり膝を着いてしまう…。
血を流し過ぎたのだろうか…。

私も動けなかった。
人が目の前で死んだ…。
別に『彼』を忌避した訳じゃない…。
思い出してしまった…。
街を襲ってきた〈あいつ等〉の事を…。

だが私の行動は迂闊だった。
『彼』一人を戦わせるべきじゃ無かった。
気が付いた時には、『彼』は刺される直前だった。
私は『彼』を助けようとしたけど、足の枷が
邪魔をして間に合わなかった。
『彼』が…刺された。
山賊は剣を振りかぶり、『彼』に止めを
刺そうとしていた…。

私は今度こそ間に合った。
自分がこんなに力持ちだなんて知らなかった。
小さな頃から家の手伝いもしてたけど、

こんなに力があるなら、もうちょっと母さんの役に立てたかも知れない。
水桶を運ぶ時の母さん…大変そうだったもんね…。
そんな事を考えていると、山賊が手にした剣を強く握った気がした。

（ああ…そっか…私は死ぬんだった…）

私は思ったよりも、穏やかに覚悟を決める事が出来ていた。少しでも『彼』の役に立って死ねる…。それだけで私の人生は少し報われた気がして…
私は目を閉じた。

だが私は死ななかった。
凄い音に驚いて目を開けると、私の後ろで座り込んでいた筈の『彼』が、剣を手に山賊を見下ろしていた。

『彼』は躊躇う事も無く山賊の頭に、手にした剣を振り下ろす。何度も…何度も…。

その恐ろしい筈の光景を見て、
何故だか私には分かってしまった…。

『彼』は、本当は殺したく無かった。
『彼』は、人なんか殺した事が無かった。
『彼』は、私を護る為に自らの禁忌を侵した。

私は『彼』の背中にしがみついた。

「（もう良いから…もう充分だから…）」

たったそれだけの言葉なのに…私の口はやっぱり言葉を出してはくれなかった。

【幕間】フィアの回想？

私と目が合うと『彼』は気を失ってしまった。
私はどうして良いか分からず、その場に座り込んだ
このままでは『彼』は死んでしまう。
少しして『彼』の知り合いを名乗る獣人が
現れた。
『彼』に私を逃がす様に頼まれた…と言う。
私は最初、山賊の仲間かも知れ無い男に『彼』を
渡すまいと思ったが、自分にはどうにも出来ない
状況だとも分かっていた。

私は『彼』を助けて欲しいと、地面に書いた。
獣人は、私の目の前で〈治癒〉魔法を使った。
私は信じられなかった。私の知る限り魔術師と
いう者は、もっと傲慢で不遜で、お金も取らず、
こんな人助けをする筈がないのに…。

そんな私を横目に、獣人さんは治療を終えると、
私の枷も外して『彼』を運んでくれた。

近くの村に着き、私達は宿屋に入った。
『彼』をベッドに寝かせ、獣人さんは治療を始める
私には何も出来なかった…。

私に出来た事は、ただ『彼』の手を取り、神様に
祈るだけだ。

治療が終わり、『彼』は眠り続けた。

時折うなされているのか、苦しそうに顔を
歪めている。
私は『彼』の汗を拭き、ただただ祈り続けた。
どれ位、そうしていただろう。
私はいつの間にか眠っていた。

目を覚ますと『彼』が起きていた。
『彼』は私を責めるでもなく、優しい目を
していた。

どうしてだろう…私のせいで怪我をしたのに…
どうしてだろう…私のせいで死にかけたのに…

そんな事を考えていると、『彼』は私に礼を
言い、頭を撫でてくれた。
私は何だか恥ずかしくて、顔を伏せてしまう。
年の近い男性に、こんなに優しく触れられたのは
初めてだ。

私が下を向いていると、獣人のビットさんと
『彼』が何か話し始める。
私には、よく分からなかったけれど、
『彼』が空中に指を動かす。私は驚いた。
『彼』も魔術師だったのだ。
『彼』は自分に〈治癒〉を施すと、包帯を外す。
そこには傷は無かった。
治療を見ていた私は知っている。
どれだけ痛々しい傷があったかを…
だが『彼』はビットさんと、私を見て不思議そうな
顔をしている。

私は次の瞬間、もっと驚く事になる。
『彼』が再び魔法を使うと、世界が揺れたのだ。
『彼』は、その光る手を右手に押し付けた。
光が収まると、急に『彼』は痛がり出す。
傷が痛むのだろうか？
『彼』が包帯を解くと…そこには切り落とされた
筈の指があった。
もちろん私は信じられなかった。
切り落とされた指が生えるなんて、御伽噺でも
聞いた事がない。
『彼』は泣いていた様だが、呆けている私に
手を振っておどけて見せた。

そこで私の感情は一気に爆発した。
本当に…本当に…本当に…良かった…と。
気が付くと私は『彼』に抱きついてしまっていた。
嬉しくて…涙が溢れて止まらなかった。
そんな私に『彼』は再び礼を言い、頭を撫でて
くれた。

だが私は気が付いた。
自分の体勢と…顔を埋めているのが、『彼』の
素肌だと言う事に…。急に恥ずかしさが込み上げ、
私は慌てて離れた。
私の人生の中で、裸の男性に抱きつく…なんて
もちろん初めてだ。
街にいた同い年の女の子達は、そうでも無かったかも知れ無い。で
も私には無理で、当分は先の事だと思っていたのに…。
恥ずかしさのあまり『彼』の顔がまともに

見れない。自分の顔からは火が出そうだ。
ヘンな子だ…なんて思われてないだろうか？
『彼』は直ぐ服を着ると、改めて自己紹介を
してくれた。『トーノ・イツキ』と言うらしい。
私も名前を言いたかった…でも、私は主を失っても
〈奴隷〉のまま…勝手に口を開く事は許されない。
彼の問いかけにも、頷く事しか出来ない。

私が黙っていると、ビットさんが私の国の事を
『彼』に話してくれた。
ひょっとしたら、嫌われてしまったかも知れ無い。
命を賭けて助けた相手が〈奴隷〉だと知って
『彼』はどう思うだろう？

ビットさんの話しを聞いて、『彼』はどんどん
不機嫌な顔になって行った。

仕方ないよね？私は〈奴隷〉だもの…
私を売って貰えれば、少しは恩を返せるかな？

そんな事を考えていると、『彼』は急に叫び、
私の腕を取った。
『彼』の手が眩しくて、私は目を開けていられず、
閉じてしまう。
やはり機嫌を損ねてしまったのだろうか？

暫くして、『彼』は優しい声で語りかけて来る。
私は言われるままに、目を開く…。

そこには…無かった。
私を、この半年間縛り続けた〈奴隷〉の鎖が…。

私は、嬉しくて…嬉しくて…嬉しくて…
申し訳なくて…有難くて…やっぱり嬉しくて…
色んな感情が溢れて…また泣いてしまった。
そんな私を『彼』は優しく撫でてくれて…
その胸の中で泣かせてくれた…。

その後の一週間、私は『イツキ様』に介抱された。
『イツキ様』はとても優しく私を気遣ってくれる。
私に温かい食事を運んでくれ、宿屋の女性に
私の体を拭く様言ってくれる。
一度、何故こんなに良くしてくれるのか聞いたが、
優しく笑って「フィアには恩がある」と言った。
恩があるのは…私の方なのに…。
私は「いつか、必ずお金を支払う」と言ったが、
『イツキ様』は微笑むだけだった。

何日かして『イツキ様』は私の傷を治してくれた。
また私はみっともなく泣いてしまった。
それも『イツキ様』の膝に顔を埋めて…。
『イツキ様』は、そんな私の頭をやはり優しく
撫でてくれる。
私は少し癖になっているのかも知れ無い…。
『イツキ様』に撫でられるのは、とても落ち着き、
安心出来て、何より気持ちが良い。
あまり感心しない癖だと、自分の事ながらに
思ってしまう。

私が泣き止むと『イツキ様』は、私の今後について
話してくれた。
どうしたいかは自分で決めなさい…との事だ。
私の答えは決まっている。
考える迄もなかった。
私が答えると『イツキ様』は、条件付きで
許可してくれた。
おそらく『イツキ様』は、私が恩に縛られる事を
怖れている。
まだ少ししか一緒にいないが、私には分かる。
『イツキ様』は、そういう御方だ。
とても…とても優しい方だから…。
でも、私が『イツキ様』から望んで離れる…
なんてあり得無い。
このまま恩を返せないなんて、絶対に嫌だ。
『イツキ様』の為なら、喜んで盾になろう。
『イツキ様』の為なら、喜んで死のう。
『イツキ様』が望んでくれるなら、
喜んでこの身を差し出そう…と思う。
きっと、そんな事は『イツキ様』は望まない
だろうけど…。

それでも傍にいられるなら何だってしようと思う。
私は『イツキ様』に救って貰ったのだ。
この身も…この心も…この純潔も…
全ては『イツキ様』の物だ。
いつか、私は『イツキ様』の『特別』に
なれるだろうか？
自分でも〈奴隷〉にまで身を落とした私には、

過ぎた夢だと思う。
『イツキ様』は光の魔術師で…
『イツキ様』はとても優しくて…
『イツキ様』は私には勿体無いくらい格好良くて…
それでも、いつか…なんて考えてしまう…。
だから『イツキ様』が傍に置いてくれるなら、
私は笑っていよう…。
いつか『イツキ様』の『特別』になれる日まで…
いつか『イツキ様』が私を必要としてくれる日が
来るまで…
いつか『イツキ様』が私を必要としなくなる
その日まで…

余談
『イツキ様』が顔の傷を治してくれた晩、
宿屋の女性を伴って来た。
私の体の傷も治してくれるらしい。
私はとんでもなく恥ずかしかったが、
目隠しをしてくれた『イツキ様』は、もっと
恥ずかしそうだった。
意外と女性には慣れていないのかも知れ無い。

【幕間】フィアの回想？（後書き）

いかがだったでしょうか？
自分の中では、この後いくつかのルートに
別れています。
悩んでいますが…まぁ、明日には書いているのでしょう…。

ここ数話は、スマートフォンで見やすい様に
書いています。
自分がパソコン持ってないので…
パソコンから閲覧の皆様には、御不便をおかけしております。

【第17話】演技のニート

カポッ…カポッ…

リズムが心地良い、馬の蹄の音。
俺とフィアが宿屋を旅立ち、もう三日が
経っている。

フィアが俺について来ると言ってくれた翌日、
俺とフィアは旅立つ事にした。
理由はいくつかある。

フィアに、ちゃんとした服を買いたい。
自分の服も欲しい。
生活用品だって必要だ。
この世界がどんな場所で、どんな文明か知りたい。

そんな所だ。

宿屋のオバさんは、フィアがジャンヌ王国の
出身だと知ると「強く生きるんだよ…」と
しきりに励ましてくれていた。
俺に「しっかり守っておやり！」とも…。
宿屋を出る時は、姿が見えなくなるまで手を振ってくれていた。
なるほど…いきなり賊と戦うハメにはなったが、
どこの世界にも良い人も、悪い人もいるもんだ。

幸いな事に、村を出てすぐに行商人の馬車に
行き会った。

大分良くなったとは言え、フィアに長距離の移動をさせる事には不安があったので、金を支払い荷台に乗せて貰う事にした。
俺達が向かっているのは村から比較的近い、商業国家ユーロスの都市だ。
何でも大陸有数の栄えた都市で、様々な人種、珍しい物で溢れ返っているらしい。
俺達が過ごしたあの村もユーロス領の一部だとか。

俺はのんびりした馬車旅、どこまでも続く草原にスローライフ気分を満喫しながら、たまにフィアを見ていた。
出会ってから、もう十日以上経っている。
フィアは随分と元気に、明るくなった。
ここ二日は野宿となったが、フィアは簡単な料理をしたり、朝には起こしてくれたりする。
努めて…明るく…。
だが時折、辛そうな目をしている時がある。
〈奴隷〉として生きたフィアの半年間。
きっと、俺にはまだ話していない辛い事もあっただろう…。
だが必要な事は聞いたし、これ以上フィアに辛い記憶を思い出させる事はない。
フィアが話したいと、自ら望むまで…。
心の傷は治す方法も、人それぞれだ。
俺が気軽に踏み込むべきじゃない。

ふとフィアと目が合う。
フィアはとても柔らかく微笑み、移り変わる風景に目を戻した。

フィアにとって半年振りの自由な身の上の旅、
自由な身の上の空の下。
このまま、この娘の傷が少しでも癒されます様に…
そんな事を考えながら、俺は睡魔に誘われて
眠りに落ちて行った。

行商人と別れたのは、翌日の昼の事だ。
彼は近くの街に寄るらしい。
同行しようかとも思ったが、ユーロスまでは
徒歩でも三時間程との事なので、俺達は歩いて
向かう事にした。

……おかしい…。
何が？と聞かれるならば、フィアの態度だ。
まあ確かに三日前、フィアの治療の為に体に
触ってからギクシャクしてたけど…。
おっ…俺だって恥ずかしかったんだからねっ？
それでも、この三日で随分と修復させたと
思ったのに…。

先程まで、俺の横少しだけ後方を歩く
フィアは楽しそうに歩いていた。
だが、悪路に足を取られてた際、フィアの手が、
俺の手に当たってしまった。
するとフィアは猛烈な勢いで手を引っ込め、
あわあわした後、そのまま俯いてしまった。

そしてそれ以降、何か言いたそうに、
俺をチラチラ見ている…といった具合だ。

ええ…仰りたい事は良く分かります…。
フィアさん…。
でも先程のは、フィアさんの不注意が原因なので…
セクハラで訴えるとかは、マジ勘弁して貰えないで
しょうか…？
異世界に着いて、一ヶ月も経たない内にセクハラで
捕まるのは…ちょっと…。
一ヶ月経っても嫌だけど…。
あと無いと思いますけど、心の中で「キモッ」とか
思わないで下さいね…ダメージ大きいので…。

そんな事もありながら、二時間程も歩くと、
丘の上から見下ろした先に街が見えて来た。
どうやらユーロスまでは、後少しらしい。

だがユーロスまでの続く道に、俺はいかにも
〈騎士団〉な一団を発見した。
いかにもな鎧姿、いかにもな槍、いかにもな馬…。
これが〈騎士団〉でなければ、俺の異世界感の方が
おかしいのかも知れない。
フィアにも尋ねてみるが、おそらくは騎士団で
休憩・野営以外で行軍を止める事は珍しいらしい。
しかも、道の真ん中で動きを止めるとなると
何らかのトラブルがあった可能性が高いそうだ。
俺はフィアに、その場から動かない様に言い、

〈結界〉の魔術をかけて偵察に向かった。
〈結界〉は外部からの攻撃を完全にシャットアウトしたり、指定された人物以外を範囲内に入れなくする魔術だ。
（ビットさん曰く、超高等魔術らしい。
最初に成功した時は、ジト目で睨まれて大変だった…。）

一応、自分に〈強化〉をかけて街道の脇を進む。
ってか早すぎだ！２００ｍはあったのに、手加減しても１０秒と経ってないって…。
ハイスペックすぎなのも考え物である。
すり抜ける木々がマジで怖かった…。

（さて…と、騎士さんは５０人位か？先頭の１０人位が固まってるけど…）

状況を伺っていると、〈強化〉された聴覚から、騎士達の声が聞こえてくる。

「貴様っ……」
「我がユーロス騎士団……」

話しはよく聞こえないが、この騎士団は目的地、ユーロスの所属みたいだ。
絡まれないで良かった…。
絡まれた人…ご愁傷様…。
俺が手を合わせて立ち去ろうとした時、騎士達の隙間から絡まれている相手が見えた。

（小柄な…少年…？）

少年は頭からフード付きのマントを羽織り、
顔はよく見えなかった。
フィアもそうだったが、この世界では頭から
布を被るのが流行っているのだろうか？

（…おいおい…勘弁してくれ…）

立ち去る気マンマンの俺だったが、視界の隅に
映ったそれに足を止める。

（子供とか…見捨てられない…よなぁ…）

騎士達と対峙する少年（？）の足元…
俺は見てしまう…縋りつく幼い子供の姿を。

さてどうするか…？
こんな時は魔法だっっ？
〈ギャルゲー脳ウインドウオープン！〉
説明しよう！ギャルゲー脳ウインドウとは
人生の困った時に出現する、画面中央辺りに出る
選択肢が書いてある半透明なアレだ！
因みにこれは、大きなお友達なら誰でも使える
スキル…いや！魔法である。
ギャルゲーを愛する者、３０歳迄童貞を守った勇者は魔法使いになる…という学説もあるのだ！
補足までに加えるが勿論、精霊の力は働いていない
どちらかと言えば妖精さん（脳内）である。

1．ＢＬっぽく助ける
2．ＮＴＲっぽく助ける
3．テンプレっぽく助ける

って、なんじゃこりゃあぁぁぁぁぁ？
？はまだ良いよ！いや良くないけどっ！
？は何だっっ？何でもそれっぽく書きゃ良いって
モンじゃねーーーってのっ！
あー、もう？！？で行くわっっ？
何だよ！この一連の流れっ！せっかく男前キャラに
なって来てたのに！台無しだよっ？

自分自身の脳内会議に舌打ちしつつ、
俺は彼等の前に出た。

「いやぁーごめんごめん！まった？」

よしっ！見事なテンプレ的助け方だ！
セリフは棒読みだけど…。
騎士団の方々も、まさか俺が他人だとは思うまい。
俺の登場に固まっちまってるぜ？

「あー、すいませんね。ぼくのつれがなにか？
わあ、えいが　はじまっちゃう！では！これで！」
連れ出そうと少年の腕を掴むが、少年は俺の腕を
振り払う。

「お主…何者じゃっ！」

場を凍りつかせる空気…。
典型的アキバオタクを見るギャルより冷たい視線が
場を支配する…。
どうやら…巻き込まれたみたいです…。

【第17話】演技のニート（後書き）

今までの話が管理しにくくなったので話数つけました。

【第１８話】調停のニート

凍りつく空間…。
こんなに寒い空間は、大事なプレゼンを任せた
部下が、テンパって社長にタメ口きいた時以来だ。

せっかく助けに入った俺に「何者じゃっ！」
じゃねーよっ！
空気読めよっ！合わせろよっ！
頼まれたワケじゃないけど…。
ほら！騎士団の皆さんまで睨んでるじゃないかっ！

「え～っと…何だかモメてたみたいだから、穏便に
済ませ様と思ったんですが…御迷惑でしたか？」

なんとかこの場を治めようとする俺に少年（？）は
構えを取った。ん？構えを取った？なんで？

……〈強化〉してなかったら、ヤバかった。
感覚まで〈強化〉されていた俺は、
すんでの所で死角から突き出されたダガーを躱す。
〈強化〉していなかったら、コイツの剣は
俺の喉を切り裂いていた筈だ。
攻撃は途切れる事無く、流れる様に繋がり
俺に襲いかかる。

「ちょっ…待て！待てって…」

なんとか連撃を躱すが、問答無用とばかりに

凄まじい蹴りが鼻先を掠める。
だが、この結果はおかしい。
俺の身体能力は、今〈強化〉で約１０倍近く
跳ね上がっている筈だ。
俺の元がショボいとは言え、躱せているとは言え、
コイツ…明らかに常人離れした戦闘能力だ。

「おまっ…ガキだからって、やって良い事と、
ダメな事くらい分かれっ！」

「うるさいっ！お主もコイツ等の仲間じゃろうが！
この子が何をしたっ！ただ貴様等の行軍の前に
出てしまっただけじゃろうがっ！それを…
貴様等っ！恥を知れっっ！」

少年の言葉にハッとした俺は、攻撃を躱しながら、
少年の立っていた場所、子供の方へ目を向ける。
なるほど…そう言う事ね…。
子供はまだ４～５歳の少女の様だった。
少年と同じくフードを被ってはいるが、
怯える目をした少女の足からは、血が見えた。
つまりはアレだ。江戸時代にもあった
「無礼打ち」ってヤツか。
恐らく、あの少女は騎士団連中の行軍の前に
飛び出してしまったのだろう。
で…騎士様の怒りに触れた…と。
コイツは少女を助けに入ったか、
ケガさせた騎士団連中に噛み付いた…て所かね。
俺は少年の蹴りを躱すと、一足飛びに騎士団

連中の眼前に着地した。
騎士団連中は、俺と少年の動きに目を丸くしていて、戦闘中は動く事は無かった。

「あの…すいません。あの女の子にケガをさせたのは、どちら様でしょうか？」

俺はなるべく礼儀正しく、目の前の騎士さんに尋ねる。うん！礼儀って大事だよね？
それに確認も大事！
一方の言い分を鵜呑みにしちゃイケナイ！

「ああ…わた…」

呆気に取られて、正直に答えてくれる騎士さん。
うん！正直って大事だよね？

メキャッ…

「ぐわあぁぁぁぁっ？あしっ？俺の足がぁっ？」

騎士が答えてくれたので、俺は遠慮なく、最後まで聞かずに足を蹴り折った。
いや…折るつもりまでは無かったんだけど、折れちゃった☆
つーか、俺は子供大好きなんだよっ！
ふざけやがって…。
す…好きって言っても性的な意味じゃ無いんだからねっ？

「これで良いだろっ！引け！それともコイツ等全員相手するつもりかっ？」

俺としては目一杯、落とし処を探ったつもりだったのだが…少年はまだ警戒を解かない。
…当たり前か。
だってホラ…騎士さん達…
めっちゃ怒ってはりますもん…。
めっちゃ槍とか剣とか構えてますもん…。

頭に血が登ったとは言え、やり過ぎた？
でも俺の中で、子供に暴力振るうのは悪だしな…。
でも正直…めっさ怖いＤｅａｔｈ！
〈強化〉してあるとは言え、怖いものは怖いわっ！
ケガしても回復出来るけどっ！
両手やられたら、魔法使えなくなって
お終いなんだよっ！

そんな事を考えている内に、にじり寄る騎士団連中
俺は腹を括って半身になり、連中の死角で
「切り札」の魔方陣を組み立てた。
狙うは一撃必殺！
いや、流石に殺さないけど…

騎士団連中の間合いに入り、一触即発の緊張に
ツバを呑む音が聞こえた気がした。
先頭の騎士の右足に重心がかかる。
「切り札」を発動させ様とした、その時だった。

「んまぁぁあてぇぇぇぇいっ！」

騎士団連中の後方から、銭〇のとっつぁんの様な
大声が響き渡った。

連中の背後から現れたのは、山の様な大男だった。
手には大斧を携え、丸められた頭に口髭と顎鬚が
映えている。
甲冑も他者の物よりも随分と厚みがあり、
大男の異様を引きたてる。

「貴様等…何をしている？」

大男の一瞥に、騎士団連中は震え上がったのが
分かった。
つまりはコイツが責任者らしい。

「すいません。こちらの連れの子供が、
そちらの騎士様に謂われの無い暴力を
振るわれたので、足をヘシ折らせて貰いました」

プレゼン等でもそうだが、こう言った場合は
最初に発言した方がイニシアチブを握る。
俺は騎士や少年がヘタな事を言い出す前に、
ツッコミ所が無い様、ありのままを口にした。
まぁ、少年も少女も連れではないが…
一蓮托生と言った意味なら嘘じゃない筈だ。
大男は少女の足と部下の足を見比べ、
周囲の騎士達に再び目線を戻す。
騎士としての矜持か、この大男に嘘をつけないのか
どちらかは分からなかったが、騎士達は

沈黙したままだった。

「なるほど…言い分は分かった。確かにこちらに非がある様だ。だが足を折るのをやり過ぎと思わなかったのかね？」

「見ての通り私は丸腰ですよ？鎧も着ていない。さらには１０対１…この状況で私を咎めると？かの誇り高きユーロスの騎士団様が？」

勿論、俺はユーロスの騎士団なんか今日初めて知ったのだが…この際だから持ち上げてみた。皮肉を込めつつ、プライドを刺激、更には正当性を盾に…だけだけど…

「いや、成る程…すまなかった。我々は任務からの帰還中だったのだがな…負傷者も出ていて、皆気が立っておったのだ」

「負傷者？」

大男の素直な謝罪も意外だったが、もっと意外だったのは負傷者の数と、その被害だった。今まで囲まれていて見えなかったが、後方の騎士団連中の惨状は酷かった。ある者は腕を無くし、ある者は分厚い金属の鎧を爪の様な物で斬り裂かれた跡があった。

（こりゃあ、気も立つか…子供にケガさせた事は絶対許さんけど…）

「すまないが、こちらの方も本国で負傷者の手当を急ぎたい…今回は痛み分け…として頂けるかな？」

「ええ…構いませんよ？あの子に一言謝罪さえしてくれれば…ですが」

「もちろんだ…」

大男はそう言うと、少女に謝罪をして見せた。少女は怯えていたので、代わりに少年が受けていた。

これが、後々まで続く腐れ縁、ユーロス公国騎士団長〈ドヴォルヴ・ユートス〉との出会いとなるが、この時の俺には、知る由も無い事だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5725x/

ニートと社会復帰と異世界と

2011年10月24日02時05分発行